

增補雅言集臨見

廿八

813.6
I 619g
Wm 1



813.6
I 619g
NND



691344

増補雅言集覽卷之廿八

石川雅望集
中島廣足補

○良の部

〔ら〕^等〔拾〕^哀成信重家ら出家侍りたる比云々

〔ら〕^補〔古〕^{射恒}「こびいらよまいらかゝきをあゝ引の山のりひあるなふよやのあらぬ(万代)雜三經通」山陰やを野をりて住菴の物淋いらようづらかくかり(千載)旅基「あたたらよをいせのたまをぎせりていもこひいらよ見つる月かか(濱松)下からのうをむらさきのかみよかたるもトのつくりふでのさきらいとかゝおくおもいろさおくのあたに

〔ら〕^補〔羅〕(紫日記)上へういらひもおおトからのくまけこのうへよいれたり

○らのへうい(源)冊御經よりとどめ玉の軸らのへうい(夫)十定家「らのへういひもの玉ゆらときかせばあまのかしらよ雲やまくらん

らいそい(禮拜)宇治拾(十二)上人涙をおとして三度らいそいす(空穂)俊かけ上ノ七人の人みな禮拜して申さく云々(同)十あそび人ら禮拜してまつる

らいたん

禮盤 (江次第) 五、四講讀師下興昇堂東西階對進就禮盤。多し。その余

らいたう

(蜻蛉日記) 三石山よをと、あまうでたりーよ心ぞかりーよなく、たら

らいねん

來年 (空穗くら開) 下、卅來年こそいつかまつり給ふべき年あれば御子の日

東や

三らい年四位より給ひかん(同) 手習 五十ことらい年過しがさきやうよか

ん侍けれ

枕

二來年の國々を手を折りてかぞへなどして(榮) 四、十あと一は來年

まさるべ

いと聞ゆれば(狹) 一、下來年つらさうべき(同) 一、下來年をかりかへり殿

上して

云々

らいけつ

來月 (榮花山) 九此月のままひの事あればさごがーうるべければ來月をか

りよとなん

思ふを

らいさう

(枕) 八、廿男ノ來シ所いとき御門をまよひらいさうとあけひろけてと

聞えをち

てあぢきかく曉よぞさけなるいかゞよくき

らい

(實方集) 仁和寺僧正御どものまらせ給ふらいのへさまかいつけたる

「思ふこと

かりもやまると心してあかたさまにぞらい奉る

らい

鬻子 (源よこ笛) 三例からせお前ちかきらいどもをかぞあやと御覽せる

に(河)

鬻子 高ツキノスガタニテ上ハマリ桶ノフタチアフノケタルヤウナル物也オ

キフチナ

高クシタル物也内ハ朱マリ外ハ黒マリ螺鈿サマト也クダモノナドイレ

ラル、物也

らち

馬場 (三代實錄) 四十元慶六年九月廿五日今大和國結作春日神社走馬場

并加掃除

先是毎年春秋祭日令興福寺結作馬埒洒掃塵穢(源) 二、五十東おもてハ

わきてう

まそのおとゞつくりらちめひて五月の御あそび所よて(拾玉) 四「神よ

かよう

ーや北の、馬、ゆふらちの外ある人のあゝろハ 放埒 モ コ

らる

(古) 同ト御時せられれる菊合よ云々

らんで

(拾) 雜天祿四年五月廿一日圓融院のまご一品宮よわらせ給ひてらんで

とらせ給

ひれるよまらとさを七月七日よかの宮より内の大をん所よ奉られれる云々

(續世繼)

七、十さゞれ石まきてらんでひろふ音を聞えける(補) (新千) 七云々圓融院

一品の宮

よ渡らせ給てらんでとらせ給けるついで云々(新續古) 四天祿四年七月

七日うへ

の御つづねよて一品宮のらんでのまらとさ一侍ける時の扇よ

らこ

(圓融院扇合) 詞書に宮の御方ようへおそ一まてらことらせ給ひて

かたせ給へるかちこそ六月十六日にうへせさせ給ふ

らんぞう 乱聲 (文徳實録) 十、廿左右相撲司率樂人於新成殿前盛奏乱聲 (源鑑) 十、ち

まはのらんぞうともものゝけるも夜よ入て、何とともえせかりとてぬ 細 勝方乱

聲に、必太鼓おどつこと也 孟 勝る時鐘をつくこと也 河 諸勝負の後乱聲常のよ

と也競馬相撲鬪鶏かとも有 (貞観儀式) 九 隨即乱聲三度

らんちやう 濫觴 (家語) 孔子謂子路曰夫江始於岷山其源可以濫觴及其至於江津不舫

舟不避風則不可以涉 (文選 江賦) 郭景純 惟岷山之導江初發源乎濫觴

らんせい 蘭省 (夫木) 廿三「らんせい」の錦の色もいからんかさへよへる山ざく

ら哉 (同) 十三、秋 雨定家 「らんせい」の花の錦の倂よいなりかきさあきのむら雨 (白文) 七

(朗詠集) 七 蘭省花時錦帳下盧山雨夜草庵中 蘭省の尙書

らう 廊 (源浮舟) 九 尼いらうにさん住侍るる此人の今たてられたるにさん (同末

摘) 九 人とぬ廊に (同) 廿三 あいふなるらうめくやあさをかううつらひなうと

り (和名) 十、廊、唐韻云廊音郎 (和名保 殿下外屋也) (源) 五、らうさも、たふれ

ふ (同) わけまさ) 十、らうめいたる方よあつまりて (遊仙窟) 長廊

らう 靈 (源あふひ) 七、此いさきまごま故ち、おどりの御靈をいふもありと聞給ふに

つれて (同) かしは木) 五、陰陽師などもおそく、女の靈とのとらをかひ申さればさる

事もやとおぞせと更し物のけのあらわれ出くるもあきよ

らう (空穂 初秋) 上、廿、詞、門 年の内よ出くる節會の中にいづれいとせちにらうあり

定め申されよや 大將督云々 内宴を聞し召もいとらうありおもしろく三月の節會の

花とくさく時いいとらうあるをとり猶おとなる花などいさかぬほさなれどもあ

やしくかまめきて哀におもほゆるい五月五日よさんある 云々 (同 吹上) 上、廿、紀の守

國へ下りて面白くらうある所にたのしひあそぶ (同) 國ゆつり) 下、われぞかこくか、

る田舎人と思ひて 云々 京人これらうあるをりせむかくて侍らまゝや (同 藤原君)

十、哥云々 とれ給ふ時に皆人哀がり木工れ君といふ人らうあるものよて是を聞しら

ぬやうかるいいと情かゝとて (同) 吹上) 下、十、をいさきひとつよをえて遠くより参る

よいさ、かあるあやまちせせ男君たち此御前よ立居つらうまつるよめやそくらう

あるわらひべ也 (同) 初秋) 三、よの中れ心ゆき猶をりき物いらうある女の情あるが

物いひかたりをどるのいかの女れいかよせまゝと思ひとづらへるが心とめてあ

きさるふと見るをりりらうある物こそあれ (續世繼) 七、廿、此右れおどりの御心を

へなどそおほいていとらうある人にておそしける上に 云々 御哥こそいとらうあり

てをかしく聞え侍りしか(源 ことふ)十けいさいとらうありまつるいさ心をへとて
えて(續世繼)八廿かの院の御匂ひかれべことごとりと申あがら哥あどこそいとらう
ありてよと給ふなれ

○らうあき(源 繪合)廿深きらうかくとゆるおれ物もさるべきよてかきうつたぐひ
も出くれど

らう(空穂 くら開)二卅御こととう出てせちよひかせ給へともさらよ手もふれを内
よ見給ふ君ごちなごもおほくの人の中よ心よく深きらうなりと見給ふ(枕)九廿
硯ささかたに塵を墨化かたつかたに志とをかくをりひらめかいらうお不きにか
りたるが云々

らう(順集)廿應和元年勘解由判官は勞六年いよへにかをらふるよかくあづめ
る人なり(源 あさかほ)五らうあきをいあづかよやさごめ聞えさけべう侍らん(同 ことふ)九
秋好ノをぐれさる御らうともよやうの事(たへぬ)よありけん(同 朝

顔(五齋 院)神さびよける年月のらうかぞへられ侍るよ(同 総角)四十カナルよべま
るらんと思給へしかぞ宮つかへのらうもあるよかたをめる世(同 若紫)廿阿ざり
あきよなるべきものよこそあめれ行ひのらうの積りておほやけよ知しめされざ

りけることとたふとがりれ給ひせけり(同 ことふ)十けいさいとらうありまつか
き心をへとてえて(大和物)二つくよ有けるひがさのこといひなるいとりあ
りをかしくて世をへける物よせん有ける(同)二女もいとらうある人ありけり(同)

四 お不えの玉おちが女といふものかんめづらうまゐりてそべると申され見さ
せ給ふに云々お不せ給ふやうたまおちのいとらうありて哥あどよくよとさ(同)
わか奇(上)。鞠ノいとらうある心をへともみえて數多くかりゆく(同)三下百いり
めしく聞し御賀の事を女二此宮の御りささまよひひをかさぬもらうありとお不
(素性集)七沓冠 志まのかも、やたりらに「やまの」下ひのくものまのりぐねの、
らうさよもあるちをみかゝるかも(大和物)六かくて世よもらうあるものよつ
かうまつる

らう(頤 榮花)四十一條の大きおとゞれ家を女院らうせさせ給ひて(源 明石)廿よ
いさよがらうとていひけいさよ(同)廿入道がらうとあめたる所と海づらよ
山がくれよ(同)かけらよ(三)鬼神もあが君をばえらうと奉らト云々(同 松風)三
中
務宮と聞えとるがらうと給ひとる所大井川のわたりよありけるを(同)四みづから
らうとる所にそべらねと(蜻蛉日記)一川のあなよ按察の大納言のらうと給ふ所

ありたり(同 繪合)八をーとらうと給へ(空穂 初秋)上八里よりらうと此物ー給ひかり

らうろう牢籠。若シゲナルコイヘリオシコメテ若シマスヤウノ(盛衰)十。頼豪が

今汝が所望を達せば山門憤をかして世上静から下兩門の合戦出来せば天台の佛法段に

忽ち亡ぬべし何ぞ戒壇の事と以て三院の牢籠を顧ざらん(同)十平家の振舞を按

るは佛法の衰微王法の牢籠時いされり(同)九頼朝こそ朝家の御歎天下の牢籠と承

て院宣と下し給るから(同)卅木曾都へうち入て後在々所々を追捕して貴賤上

下安堵せし神領寺領押領して國衙庄園牢籠せり(同)義仲都にて狼籍斜からる人民

牢籠して貴賤をさきこと(源 藤はかま)十せてがでらまかくゆづりつけ大ぞう

の宮づかへの筋はらうろうせんとおぞし置つる(細)鳥の籠に入れ獸を牢に入たる

がぞととかり(同)わかま)下七かんのさとの胸つぶれてりるをりのらうろう

からせいえ參るまどくとむひむづろくおもふも(枕)八名おそろしき物、らうろう

うれをさ(著聞)一かの國よしまの明神とておそしまは神主牢籠の事ありて論しけ

る者ありとて神田をりとりんとおしけれは寶前より抗三百斗出たり(淮南子)本經

訓一天地馬融廣成頌注阜牢猶牢籠也とあり(類聚雜例)大納言例依隔日牢籠所申

行歎(尺素往來)日吉祇園兩社馬上役之事京中有德者每年牢籠雖爲不便神慮既令然
之間自往古云々

らうとう郎等(新猿樂記)四受領郎等(源 玉かつら)十そのとーく身のさそれと思

ふ郎等ともひみなるて來よけり(同 浮舟)五又此あやまちたるもよき郎等なれ

どりゝるあやまちたるものといかぞりつかさんとて(朝野群載)廿新任之吏赴向

任國之間郎等徒然之中或奪取人物亂同僚仍郎等之中撰定清廉勇士令制止件事

らうがひーき乱ガハシク(源 蜻蛉)廿女房さちらうがひーきかりおそいまめおほ

せらるゝことおと申て(同 夕顔)四らうがひーき大路よさちおそいまて(同 同)九

又かくらうがひーきとかりのよういさを(同 柏木)十行ひがちにかりよて侍れば

りゝるほどのらうがひーき心ちるるよよりえ參りこぬを(同 玉かつら)廿らうがひ

ーきおと侍らト(蜻蛉日記)三日比例の香もりをゑて行ひつるも俄よかちら

數珠もまきて打あやをどらうがひーきいどぞあやしき(空穂 樓の上)六十空の雲

のさわがしくらうがひーきことありとてひきさしてのありその世よひき給をせか

んいどきりまほしき(源 横ふえ)六いとあまたらうとりちらくひかなぐりか

と給へばあからうがひーきいとふびんなり(同 常夏)四らうがひーきとかくまぎ

ん方もーらざらうとーと思ひー子ども失ひて(源花の宴)六女もわかうたをやぎて
つよき心もーらぬあるべーらうたーと見給ふ(同)八姫君いりよつれーから
ん日比よかれべくーしてやあらんとらうたくおせーやる(同)葵(四十)わの御心あり
さまやとらうたく見奉り給ひて日ひとひ入りゐておとさめ聞え給へどとけがさま
御とーさいとゞらうた々あり(同)桐壺(廿)母君なくてだにらうとくー給へど(同)廿
あめーとおせさでらうとうー給へ

らうたーとおせ(源空せみ)初いとらうとーとおせ(同)紅葉賀(十)ゆー給ふ御手
つさいとうつくーければらうたーとおせして

補 枕 枕 おそろしきもの、所

らうくー 功者、ヨキ、形 ○らうと々どひことなり俗は物の功者ある意なり勞々ー也

(枕)七、廿 人ノナグ、合セシ所、かたくなよのあらでさやうの事はらうくートかりれるが

○コレヲ功者トモイフベシ注功ノ入タルナリ(源幻)六紫ノ死ウセ玉ヒ、後心とせ

おたちおとめやそくてうあるまつよおせたるけとひたゞからまーよりいらう

らうーとおもやれ○コレヲ功者ナルヲニテハナシ

らうくー (源東や) 四 此けさうれ君達、心もらうくーくてぞあるべし

れかさちあんいミトのなるなどをのしき方よいひかして(同)七姫(六)姫君のらう

らうーくふろくおもりりよミえ給ふ(同)竹川(七)是もいとらうくーくあ、ろよく

くもてあしてさふらひさまふ(紫日記)六十宮の御心あかぬ所なくらうくーく心

よく、おそーまは(同)五十見もてゆくよこよなく打まさりらうくーくてくちつ

きまそづかーけさも匂ひやかなることをもそひたり(同)五十髪なども常よりつくろ

ひましてやうたいもてあーらうくーくをか(源さかさ)御手こまやかよのあ

らねどらうくーらうさうおとどかーうなりよなり(同)須磨(廿)物の色ーとまへるさ

まをさいときよらかり何事もらうくーらう物ーとまふを(空穂)た、こそ(五)かさち

きよらよらうくーくとしわかきをみ給ひて(同)俊隆(上)心のらうくーき事世に

聞えさかくて(同)樓の上(七)まてさかの院のらうくーく花やりよめでさせ給

ひて(同)藤原の君(六)あるが中よかさちきよらよ御心らうくーく(枕)六、卅大納言

殿の物くーらうきよげに中將殿のらうくーらういづれもめでたきを見奉るよ(落

くろ) 四 ふみをよみ給ふよもさとくらうくーく心がらもいとーとければ(枕)

三ノ。郭公(チ)イ、夜深く打出たる聲のらうくーらうあいぎやうづきたるいとらう

心あくがれせんかたな(狭)二御顔のままかよらうくーくあいぎやうづき給へ

ひよむざん無二(盛衰)廿四、一閻浮提無二無三梵閣鳳臺高くそびえて

ひるん謀反(續紀)廿ノ鹽焼等五人乎人告謀反汝等爲吾近人云々

ひべ此詞の部の出せ

ひべく源 藤の裏葉六のまめやうひべくき御物語のこいむ

りりよて花のけうようつり給ぬ(同)をせめ八かたくおしき姿をよもそちなうお

も、ちよとづのひむべく(同)帯木廿さるべからんさうどの云々むべくいひ侍の(枕)八ノ

くいひ侍の(枕)八ノのさなりてされたるむべくき所の前裁いよ

むとく(枕)十、廿お前の櫻花也色いまさらで日なごはあたりておぞまわろうあるご

よとびいきよ雨のよるくふりたるつとめていとどうむとくかり(同)七、むとくか

るもの(落く)二中々むとくあるわざかなといらへし(同)同いとむとくある

わざかな今いかゞいらふべき(同)二いとむとくよある御車のぬいかか(源とこ

夏)二西日よあるやと蟬の聲などもいとくるいけよ聞ゆれば水のうへむとくなる

なふのあつりそさ哉(同)をとめ五十さがの大るのわたり北野山むとくよおさ

れたる秋かり(同)梅のえ八いづれをもむとくからせ定め給ふを(同)竹川)二御けそ

ひよおされて皆人むとくよ物給ふめる(同)みのり八こよひのそなれたる心ち

してむとくかりや(枕)六、むとくよいひをいさる(空穂 國ゆづり)下、五むとくよいあ

らでありがさきよこそ(同)藏ひらき)中、物うくなりまたるのむとくよなりもてむ

べる(同)下、四いさほひかくころき人のむとくあるつかさにて年頃へければ(源 蓬

さふ)廿むかよしあるのさきかありし中門なごましてりさもなくかりて入給ふよ

つれてもいとむとくあると(補)狭)下、いそのおきをも此所にていいとむとくにて

その侍らめ山の御さき此露を馬のむち入てむらひつ、いれ奉つる(補)ふちと

むち(源)よきふ)二御さき此露を馬のむち入てむらひつ、いれ奉つる(補)ふちと

もいへりふの部は出

むち無智(宇治拾)八聖かれと無智かれはるやうよとあされなるあり

むがそり身替(源)柏木)十おそろしとおおむひしことのおむくひなめりこの世よてか

く思ひかけぬあとよむがそりきぬれば後の世此罪もをましかるまかんやとおぞ

(狭)三、中其むくいひ必我身よありかんと只こよひの内よむがそりぬること、ちよ

(補)平家物)ちよんよ申おこなひしことのおくぞおくぞや身の上おむかひりよ

きとおもへバ

むかき行騰(空穂 俊かけ)五十九づねまるとてむかきをときて苔のうへま

き(宇治拾)六、十夏けのむかをきまきて(著聞)十六ありまの湯へゆくとてむらさき
 を人よりたり(和名)十四行旅具行膝、釋名云行膝音與膝同行膝行騰也(拾)物名
 かのりそのむらさき更科日記五十人のたゞ野にるて夜を明け草の上よむかを
 きを打りきてうへよむらさきをきいてとわかかくて夜をありはむかをきをし
 東鑑に(拾玉)四「東路や毛ふかき馬にくつかりて我むかをきもおそれぐちなる
 もあり」
 むらへ迎(宇治拾)四極樂のむらへいまはらんとまたるゝあ(同)同ささかりの物つ
 かひたる火のくるまむかへあくる云々(源夕かほ)誰とかくて二條院よむかへん
 (同若紫)卅少納言判官も御むかへあなご(枕)六御むかへに女房春宮のあとも参り
 て(源紅葉賀)六一條院よ人むかへ給へりと人の聞えければ(万)八「君が行けお
 ぐくなりぬ山たづの迎かありんまちよかまたむ(源夕うは)廿あかつきよ御むらへ
 よまゐるべきよ申てあんまかぞむべりぬると聞ゆ(同同)四十大との我御車よて
 むかへ奉りて(同關屋)二むかへにきさる人々(同松風)六かゝる御むらへよてのぞ
 るさいとひ補(宇治拾)七廿そのこどもむらへよ馬まくらおきて(万)卅七「あち
 ま野にやとれる君がかへりこむときの牟可倍といつとりまたむ(伊勢物)さりけれ
 ば此女のせうとよさうよむらへよ來りければ(空穂としかけ)

むかへとり(源みをつくし)十るるよふれてむかへとりてあらせれど(同わかあ)上七

十御馬ともむかへとりて右の司どもこまのぐくして死ゝる(同わか紫)廿いかよ

かまへてたゞ心やそくむらへとりて

むかへのくも(續古)釋歌「うき身をもすてぬちのひをまちとびぬむらへの雲よそ

らごのめをそ(續千)釋教「かねておもふむかへに雲のあらまよあゝろようかぶ

西の山のそ

むかへて(源わかあ)上六もやのおまゝにむかへておとゞれ御座あり

むかへゆ(源わかあ)上七御むかへ湯よおりたち給へるもいとあそれに

むかふ(空穂としかけ)上大般若を書て供養せよ汝日本の父母よむかふべき(同)同

おもひのあさきむかへんどの給ひき(新後)夏信「五月雨よゆふはむかふこ

かと川せかれていとゞ水まさりつゝ(同)秋上「ほともなく雲のおきたよ出よけり

あらしよむかふ山のとれ月(風雅)伏見院「うちむれてあまどお鷹のつをさまで夕

よむかふ色ぞかあしき(同)秋下進子「見るまよかへよきえ行秋の日の時雨よむ

かふうき雲のそら(月清)下「玉づさを待らん里の秋風よそるるにむかふはつかり

のこゑ(同)上「あらたまのとゝを雲るよむらふとてなふもろ人よときたまふなり

(玉葉) 秋上、從三 位親子 「また秋のうれへのいろよむかふ也をそなが風子庭の月り夕(風

雅) 戀二 永福門院 「うれしとも一のよやいながめらるゝまつよにむかふゆふくれの空

(同) 雜上 爲家 「さつきやとともよむかふあかむりあふもあはぬもあはれよのなか

(同) 雜中、從三 位親子 「つれとと山陰をさき夕ぐれの心にむかふ松の一もと(後拾) 冬 爲善

「とやこへのととともよぞりへるべきやがて春ともむかへがてらに(万代) 春上 忠見

「春霞たつといふ日をむりへつゝ年のあるととこれやかりかん

むかふる(伊勢物) 九十一 「ちぐれ秋ひとつの春よむかはめやもみぢも花もともよこ

そちれ(源 帚木) 卅 おいらりに云々むかひいたらん

むかで(和名) 十九 蜈蚣兼名苑云蜈蚣 吳公一名蜈蚣 疾梨一名百足 和名無(續紀) 六、廿

百足之虫 乃

むかー(伊勢物) 二 むかー男ありけり(今昔) いまのむかー云々

むかーいまの(源 梅かえ) 二 とうぞもの昔今れとりからべさせ給ひて

むかーへ(重之) 十四(玉葉) 雜一 「むかーへをおもふ涙の春雨のわが袂にぞわきてふり

とる(古) 夏 忠岑 「むかーへや今も戀しき郭公ふる里よもあきてきつらん(補) (古) 忠

短歌 あはれむかーへありきてふ人まろこそいうれしとれ。むかしへのいと 同義

むかーへひと(土佐日記) 下 むかーへ人の母ひとひかた時もとをれねばよめる

むかーがたり(源 花散里) 五 昔がたりもりきつくはべき(同) わかき 下 五人々にあそ

よませて聞給ふりら世のことひよひ集めたる昔語どもよも(新古) 雜上 「あや

くもりへさの月のくもりよ昔語よよやふけにけん

むかーのひと 昔の(源 うつ蟬) 九 ちやうなるのあはれもそふことゝかんむかーの人

もいひける(同) 早蕨 三 さまめあしきけしきをひてむかーの人よもおやえ給へり

むかーおやゆる(伊勢) 七(後撰) 雜一 ことの葉よとえせぬ露のおくらんや昔おやゆ

るまとるしこれバ(枕) 八、十 ちりし覺えて(源 さかき) 九、十 ちりしおやえたるそその

の局に(同) とどめ 三、十 ちりしおほえて大學のさきゆく(同) さのらひ 十一 見る人もあら

しよまよふ山里よ昔覺ゆる花の香をそる

補 むかーく(万) 八、十 ちりしもあるり〇おむかーの畧也

むかーやう(狭) 三、上 是のつよき文字づかひ昔やうよまべる(源 よもきふ) 四 御て

と共もいとごさいなれたるが昔やうよてうるのしきを

むかーさま(源 椎かもと) 六 昔さまにてもかう迄はるけき野邊へわは入給へる心さ

し(同) こてふ 十 ころを昔さまよあせらへて

むかひみどり(空穂 藤原君)廿もさあらんすくせかくばまこし心もとなくかんあらん男女の御中のむかひの緑のまゝかりときこゆ

むかひひと昔人(空穂 國ゆつり)中このむかひ人の志賀の山もとひえつ下のわたり(源 玉かつら)四昔人よいとよくおぞえてわりびとりけり

むらゝものかたり(源 夕かほ)廿むらゝ物語よこそかゝることひまけ(同 須磨)卅むらゝ物語など給ひ御さま

むらひ向ヒ(狹)一上四堀川といへりとりや大納言ときこゆる人の向ひは竹おそかる所とおぞゆるを(万)廿まをらをのさつやさばさ立むかひ云々(拾)八戀五「住吉のさしにむかへるあそぢ島あされと君をいもぬ日ぞあき(源 夢の浮とし)五母の尼のらうけ俄はおありて云々 來りしむまかりむかひたりし(同 帶木)四曉に御むらひよものせよと云々(同 わかき)上八今いたむらふるもちををまちをべるぞと

むかひさら(源 さかさ)八むらひさらの限りなくとおぞはひ

むかひわさり(賴政集)年老て後むらひわたりありける女をやさしきさまよのあらで申すたらひて後つゝのりける

むかひさる(源 幻)七人にむかさんふとさかりのさかしくも(古事記)中五 牟加比素

流(源 ちき舟)三火あかうともてものぬふひと三四人るたり云々むかひたる人それのくかんわたり給ひぬると御せうそこ聞えさせ給へらんこそよからめ(同 うちせみ)三さてむかひるらんぞとさやと(同 夕かほ)四うちとけてむらひるる人(同 紅葉賀)廿女あが君くとむかひて手ををるに

むかひつぶて(平家物)くきやうてん上人のめさるゝところのぐんびやうといへばむかひつぶていんちいふかひあきつづくんトやさら云々

むらひのやま(蜻蛉日記)此車とむらひの山のまへある原よりて

むらひのき(賴政集)「心をむらひの岸よりくれともよせぬの老の波よぞありぬる

むらひあせせ(著聞)六四永觀が家と此ぬゝが家とむかひあせせちかゝりぬれば(同)三五十龜山殿の宿所むかひあせせよ有なる

むらひめ(字鏡)嫡ムカヒメ(日本紀)正妃ムカヒメ

むかひひ向ヒ(源 竹川)廿三 いたうちろめさき御心ありけりとむかひ火つくれば(景行紀)六向燒ムカヒ(古事記)中卅。景行段 以其火打而打出火著向火而(盛衰)卅六源氏の大手のこやれ陣をとりて遠火をたく平家の生田の森に陣をとりて向ひ火

増補雅言集覽 卷之廿八

をあとに(とりかへそや)二(源まきとしら)十よくけよふはべうらみかどし給ひ
中々ことつけてこれもむかひ火つくりて有べきを

補むた(万)五十風のむたよせくる波(同)二風之共(同)十風之共
雲の行と云〇何れも風の随意の意にして風と共といふ意に非むた約まり

てまとある其まをまよともまよくとまよまともまよともいへる也(古事記)上
下照比賣之哭聲與風響到天又書紀一書寶祚之隆與天壤無窮者矣れらむむとよ

むべ(以上三好)七(万)十「とねのへにふりおける雪一風之共(同)十二浪之共(同)十六
あれども(同)十五君我牟多めかまよものを云々(同)十六浪之共(同)十六玉藻のかた

もひよごが思ふ人の言のまげく(同)十二一國とをみおもひをこびを風の共雲の
ゆくこととの通む(同)九神神之共あらをひのねて(同)十一春霞かかるとむと
は青柳の云々

むい(無代)廿諸卿の理政を無代にすれば(同)たれか佛法を無代より逆罪を
相まねく(同)廿六ま起請におそれ日比の本意無代あるべし

むたう(無道)三衛門督のむどうあるやうかれと(無量壽經)下不知修善惡業
無道

むれ(拾)春よみ人「花見よむれてゆけども青柳のいとのもどよひくる人もあ
(古事記)上卅牟良登理の(古)下「思ふとち春の山邊に打むれてそこともいとぬ旅

ねして一の(源あふひ)四十わかれて一人々の所々むれるつ(伊勢物)九それ川
のはとりよむれるておもひやれば(万)九廿「朝日てるさたの岡邊にむれるつ、吾

かく泪やむ時もあ(枕)五あるかぎりむれざちてことにも似(後)秋中よみ「女
郎花草むらことむれたつ誰まつ虫の聲まよふぞ

むれらか(宇治拾)九物にむれらかは得たるあそよれ細々よ得んとの給ふころき
事あり(雑々記)一度丸ナガラ也トシルセリ

むつのおか(回國雜記)十冬地「おをべて草木よかひる色もな誰のむつ
花ととるらん(琅耶代醉編)一草木之花皆五出雪花獨六出云々(古今詩話)天上有

瑞木花六出注雪ナリ章考標春雪詩六出花飛處々飄

むつる(同)上廿「鶯の花よむつる、聲さけは戀しき人ぞおもひやらる、(源わか
あ)下きぬのをよまつそれよりふむつる、(狹)三猫ノよろこびてむつ

る、いとつくうらうさ(散木)「をいとかねこれもちりあべこん世よも花に
むつる、虫とならせや

〔むつかり〕(源 帚木) 卅 かういのあはたれぞ守心なりとむつりりておろしつれを(同
 夕かほ) 十 橋よりも落ぬべければいでこのあつらきの神こそさきうおきたれとむ
 つかりて(大和物) 一 いかかるどりよか有んむつかりて親をらからのいふ事もき
 めで法師よなりぬる人のかくうるさ死事いふものかなといひれば(源をとめ) 卅
 うちむつかり給ひて(空穂 菊の宴) 上 廿 ありく其事となきものからさわがしくの
 侍るをまたまへむつりりて久しくえまらざりつる事(同 藏開) 上 八 八 まりて心と
 たよやらんと聞え給へばゆるし奉り給へばよるひるぞむつかりおのりまは(同)
 中 廿 云 聞え給へりされば御かへりも聞え給へばむつかりて大宮いたきて日の
 五 々 々 聞え給ひぬ(宇治拾) 三 十 尾張守宮司 見参りも参らぬぞといふよさきざ
 おまゝふ給ひぬ(宇治拾) 九 十 召所 見参りも参らぬぞといふよさきざ
 きさる事をいとてゐたりければ國司むつかりて國司も國司にこそよれ(源 竹川) 卅
 くるしうてふいたるに源侍従を院よりめいたればあなくなるしなばいやむべきよ
 とむつかりおがら参り給へり(詞花) 上 後二條關白よりおき事にてむつかり侍りけ
 れば家の中より侍りおがら前へもさし出侍らで女房の中よりいひ入侍りける 源 仲正
 (空穂 初秋) 上 左大將 政頼もさかんおもひ給へむつかりてそなたよもまゐりこん
 と思給へつるよ(源 浮舟) 卅 左のおとゝかともむつかり聞えさせ給ひて(同 横ふ

え 十 此きとまつてなきむつりりあか給ひつ(同 玉葛) 卅 さりやたれかそのつ
 かひからひ給へんぞむつからん云々 年へぬるとち打とれをぎばもむつりり給
 へんとや(空穂 俊かけ) 六十 まゐり給ひしるばいとどうむつかり給て(濱松) 三 うち
 むつりり給ふを(同 國ゆつり) 上 十六 あり心うやくひ物むつかりやくは侍りいひて
 聞えむとて出給ひ(狭) 四 下 いとあるまどくおやうしき御心かりとむつりりさまえ
 させ給ひてたゞいざし出たて奉らせ給へばいとむつかりおぞななかかれて
 〔むつかる〕(宇治拾) 十三 廿 ひと々参物のおそきとてむつかる(源 わかし) 卅 心せられ
 る人々のあまよく例の御くせぞと見奉りむつるめり
 〔むつからせ〕(源 とし姫) 四十 六 ありさそ参り給ひそとむつあられて(今昔) 頭中
 將よりそとめてむつからせ給ひけり(狭) 四 上 いとふるめかきせたどがまひ又むつ
 からせ給ぬべかめり(同) 三 下 心つかふべき程よもおとせせなとむつからせたまへば
 (同) せめてむつかりきをりくひ打むつあらせ給ひて(源 玉葛) 卅 わりき人のくる
 ーとてむつかるめり
 〔むつかり〕(枕) 三 廿 さうびの近くて人々近キ 枝のさまおとむつあしけれとをか
 (同) 五 にくき物、いそぐ事ある折よながごとをる客人あなづらひしき人からば後よ

増補源氏物語 卷之十八

なごいひても追やりつべけれどもさそがよ心そづあしき人いとよく一(源 夕かほ)
九 けそひものうとくなりゆく右近のさあなむつかしとおもひける心ちとなさめ
てあきまごふさまいといみト御(宇治拾)三 かんちむつかしがりて

むつりしき ^け ^う ^く (空穂 吹上) 下、十、源氏君 詞 夕にかくむつかしき所のまこもり侍

れバいとゞつさあき心ちをるを京のやりて宮づかへをもつかうまつらまほしう
侍れど(同 初秋) 上とふ内へ参らでこもりものをれバむつりうおもゆるかを左

大將殿へやまうでま一(同 國ゆつり) 中、七 によるの同一所とおもへどむつかしきも
のかりいひ煩らひさゞらんとおもへバ(同 樓の上) 下、六、藤人 詞 きたれ足の動かれど

侍りまぎにかづき給うる物の簞むしのやうよてやむぐめきまらんといふ程に内
よりふと一雨の足に村雨をるを簞虫と何むつかしくかけていふらん(源 をとめ) 九 廿

内府 九、大方いとむつかしきとけしきあて(枕) 三 刈かやりんたうの枝ざしなごも
むつかしきたかれど(源 椎か本) 二 むつかしきける笹のくま(同 夕かほ) 御ものいご何

やりやとむつかしうつゝませ奉り
むつりしき ^{ムサノ} ^{ガルナリ} (源 夕かほ) 初 むづかしける大路のさまを(大和物) 四 さう

ぞくきよけよむつかしき事かともかくて有れバいとさよ夕まかほかたちも成よ

けり(源 ず、虫) 五 僧の法服かどそべて大方此事もひ皆紫の上せさせ給へりあや
のよそひよてはさのぬひめまでといる人のいかよあべてからせとめでなりとやむ

つりうあまをる事ともかな(山家) 其つりの繩遙ま遠く引わたして通る舟のそ
の繩まあたりぬるをバかこちかゝりてかこけがましく申てむつかしく侍る也(枕)

十、よの中の腹さゞりうむつかしうかた時あるべきあゝろもせせいづちもしゝいさ
うせなバやと思ふよ(同 九) 十八、ふく顔やいかよぞそれの横笛も吹かありりなめり算り

さいいとむつかしう(源 紅葉賀) 九 おほいどのいとやんごとかくておのしこゝか
こあまさかゝづらひ給ふをぞまこととおとあび給はんぞよのむつかしき事もや

と覺えける(大和物) 三 とどりこゝちのまご怠りてねどいとむつりう心もとあ
く侍れバかん参りつる(源 帚木) 十五、いとむつりう夕まさしこめられて人あまご侍め

れバりしこ夕まと聞ゆ(同 玉かつら) 廿 三人あがらむせかへりいとむつりうくせき
かねさり(同 夕かほ) 卅 鳥べの、方あそとやりさるほどあど物むつかしきも何ども

覺え給ひせ(枕) 八、むづかしける物ぬひものゝうら猫の耳のうち、鼠のいまご毛も
おひぬをそのうちよりあまごまろをしいでたるうらまたつりぬか衣のぬひめあ

とよきよけあらぬ所のくらきことあることあき人のちひさけ子もなどあまごも

ちてあのかひさる、いとふりうも心ざしをき女の心ちあううして久しくかやみたるも男の心の中よひむつかうなるべし(宇治拾)一我もとのうをわたひむつゝう何のあるよりかゆきところもいでくる衣おれば(源)やとり木二七十南の宮よりとて何心もかくもて参りたるを女君例のむつかうき事もこそとくるしくおせとどりかくさんや注薰ノケサウノフヤアラント也(同)もき一卅殿もものむつかうきをりハ近江の君とるおそよろづまぎるれとてたゞわらひをさ(枕)十一、されど雨のふる時ハさむつかうけさまでそれん一りつる空とも覺えをよく、ていみトきはそどの、めをたき所も覺えをまいていとさらぬ家などいとくふりやみねりいとぞ覺ゆる(同)十二、牛かひわらその例の牛よりも志もさまようちいひていさうはしりうつもあかうたてと覺ゆるり男もなごのものむつかうなるはさきまていかで夜ふぬさきまおひて歸りなんといふも猶主の心おしとらられてとみの事ありと又いひふれんとも覺えぬ(紫日記)下ふる歌物語のえもいとを虫のまをかりわたるむつかうくもひちれをあけてとる人も侍らぬ(つれ)一、百四十遅さくら又をさまト虫のつきさるもむつり(同)二、百七十用ありて行さりととも其事をておばとく歸るべし久しくるさるいとむつかう(紫日記)上次の車は小少將宮の内侍次

ようまの中將とのりたるをさろき人とのりさりとおもひたりしこそあなこととくいとくかゝる有さまむつかうおもひ侍りし(同)七、十まかゝさへもとかれかなしとぞづかゝきまのあらねむつかうと思ひてはとられたる人よいとくかりさて、侍れば(狭)一、十内ハハわざと節會をともなきよのつれとにおせさる、ま雨雲さへ立わたりてものむつかうさかぐさめ(同)八、廿たふれの口せさみもこちたうむつかうさへおせさるればいづちへりまかり出んと申給ひて對へたり給ひぬ(同)卅、せちし引よせとまふをあむつかうあつく侍るよとひあしひ給へる御あそひいとをか(宇治拾)七、くゝる所は庄をよぬれば別當何くれと出來て中くむつかうく罪えがましく候(源)よもきふ十るかりあどのむつりさものとおせしやるらめと(著聞)十七、猶とゞまりぬ雪ふり風ふさて聞つるは合せて世中をむつかうく覺えて(十訓抄)一、十山の奥のかたより大なる蜂云々打むれていくらともかく入集るさまいとむつかうく見たり(源)紅葉賀卅ことのつひでこといひむかふるくさひひかるをいとゞものむつかうさきひとゆるとおせしおらるべし(同)四上のおせつらおがり聞えさせ給ふをまづ見奉りて奏し侍らんと聞え給へどむつかうなるほどおればとてとせ奉り給ひぬもこととりなり注御子ノ生レ玉フ

キハ、イブセクアルトテ藤ノ源ニミセ玉ハヌナリ(宇治拾)三國のものとも尊がりて此僧は歸依しあひさりしを汝むつかかりて其僧を追もらひてき(同)三そまうづきてさうくと塚まであり家の人々もさてあひ給ひてあらんものむつかしく覺えてをか外へはたりはなり(同)いかる事あか此塚のうさそらちかくの下司をともえるつかむつりし事ありといひつたへて大方人もえむつかねバ(源)こてふ(一)廿御手をとらへ給へればいとうさて覺ゆれぞ云々「そそのかどよそふるから橘のさへもかかくなりもこそをれむつかしと思ひてうつふし給へるさまいみどろをつかう(同)廿色し出し給ひて後の大田の松のおもひせたる事なくむつかしく聞えさまふ事おほかれいと所せきこちして(同)浮(六)むつかしきやくかとやりて。ムサキ心ト又我心ニイ御(散木)「雨それぬさつさぬらしま衣むつりしままであまゆめりせり(同)「かやり火のふりにかるゝおもをされものむつかしきわがころろを(万代)相(六)「思もとやくるしやなそとおもへどもいさやこびしやむつかしの世や(金葉)戀下「あー垣のひまをくゝるくものいのものむつかしくおぼるわがこひ(源)とどめ(卅)明くれにつけて老のむつかしきもあぐさめんとこそおもひつれ(同)卅。大宮いそむつりしまよとなきあえられそ人

の御をくせくのいとさためがたくと(給)狭(四)あかむつりしをそくやさゝまいとくらしとて(和泉物)ひとのいふまゝとにこそとおぼれむつかしけれとキ心

むつかしき(狭)一卅よき日して侍従の内侍のもとにはのめろし給へりしなどの給へばあなむつかしやありそつべくも覺えぬ世よ云々(同)二上大将の出給ひておきふしおぼしつくるにかけてもおもひよらせむを聞たるもむつかしうとづらひしかりつる御あさりあいかまたづねよりくる夢のうきそしどとうつゝの事とどおぼされぬ(同)二下心よいてひき給へる例のいひしらせ心ぞをく哀なるよ云々雲るるるかまひひきさのゆる心ちをるをかくれとの、中納言の二の舞よやならんとむつかしければ撥ついさしとまへるを人々も宮もあかおぼしめたり(同)時雨どちて折々打くらがりたる空のけしきものむつかしければ(同)四十さてふしさらばたれもさそがま万をきておぼしきわがんもむつりしければわれもあらせ落るかまどとのこひかくしつゝ(十訓抄)一十。驚ノ命助東北院の北の大路よてからき目見て侍りつる老法師に侍り生る者の命よ過さるものなりかばかりの御トひまいかでる報し申さむらん何事にてねんころをる御願一事叶へ奉らん

おのれのかつ知せ給ひたるらん小神通をえたれば何かの叶へざらんといふあさましくめづらかかるわざのあとむつかしく思ひながらこそやかよいへばやうあそあるらめと思ひて補(宇治拾)九十佛師もむつかうなれば功德つくるもろひかくお平ゆるに枕八九此ころぬき人いとおほかりをといひたるむつあううちまぐ人たよあり同十一十二とな火をほかさまよりきやりてををかさねおきたるいたゞさま火もおきたるがいとむつかう源と夏十十一かのめよ思ひをぐさんことのとさまかうさまよかたきぞよつりむつあうき御かさらひかりける

むつかうきこゝろ源うき舟八老ぬる人のむつかうきあゝろのあるよこそよくむいめのとやうれ人をそしるおめり

むつれ人丸十九花よてふこゝにてつねよむつれおんのさけからねば見る人も豊後か能宣四拾秋一女郎花匂ふあさりにむつるればあやかくつゆや心おくらん

後戀のさどわりあきものいかりけりかつむつれつゝあつぞ戀き源帯木三一心のうちよおもふことをもかくいあへをかんむつれ聞え給れる盛衰七侍

従大納言の作として引さる今様よわれらがあれこし手枕の絶てひさしくなりよけるかよよひまかくむつれけんかからへもせぬもの故よ源夕きり七十見つれてよ

ろこびむつれあるの上を戀さてまつりて同帯木四十世のさとひよてむつれさべらぞと申補同をどめ四十一鶯のさへづる春のむかひよてむつれ花のかけぞのそれる

むつれかゝる狭九思給ふ事ぞあらんわが心よへどてきの給へを近うむつれかりらせ給へば

○むつがたり堀百冬埋火のあさりよ冬のまとあいてむつがたりをることぞうれしき夫六一もろともけけふぞこゝろのゆきよけり人づてをらぬむつがたり

て補隆信集かいとがきむつがたりなぞりたらひかそいつゝ

むつのを六帖五貫之むつの緒のよめをよぞ香のよふひくをとめ子ガそでやふれつる補河社云あれの和琴をむつのをとよめるをドめよ

むつのつかさ左右近衛左右兵衛左右衛門といふ年中行事歌合一とよまふ今日のためとやあやめぐさむつのつかさもりねてひくらん。此歌六衛府あやめを奉る心よや

むつのみち拾玉四今のよもまよひのそてト六の道よかへりものよ五相成身右京大夫集廿一むつの道をいとふこゝろはむくひよ佛のくまゆかさらめや夫廿四六條院宣旨一それがささまとひの雲にくらされてむつのとちよやいまりへる

べき(新後撰) 釋教、花山院内大臣 「六の道まよふとおもふ心こそたちりへりていゝるべなり

けれ(玉葉) 釋教、雅成親王 「たづねよと年ふるやとをよそよ見てむつの道よの足もやをめ

せ(玉葉) 釋教、行圓上人 「むつの道四つのちまたのくるいそいづりかひりてををせ

つべき

むつまい(いせ物) 十六まことよむつまいき事あをかかりけれ(源) 二廿とへ

ぬるむつまいさ(落く) 四さるべき人々むつまいき御前よのさし給へり(源) 夕

かは(四十) 九むつまいくおやれもんさうせかせ(同) 帝木 卅御ともよむつまいきかぎり

しておのいまいぬ(同) 夕 卅此人ひとりあをむつまいうもあらめ(同) 四十「見

一人のけふりを雲とながむれを夕の空もむつまいきりか(神代紀) 下廿何以結親昵

之情乎(伊勢物) 七段 卅「むつまいと君のあらせやとづがきの久き世よりいそひ

そめてき(空穂) 櫻の上 十九 若君の此殿をばてゝぞとてむつまいうまどとて奉り給

ひ云々

むつけ(夫) 卅(新六) 五 八「おのづから手枕をづねをはればわれおものせよ

もむつれたり

むつごと 睦言。男女ノ間(源) 帝木 卅かゝるつひそい各むつごともえのひとゞめ

ぞかんありける(同) 八(みゆき) 十 いろくなり御むつごとこのさためをおやい出て(續紀宣命)

大原よときゝてまかりてさまのむつごとなぞつくして(隆信集) さだのいづものかたかゆきよをむきて

ことよまどつきかくは明ぬめりいづら秋のながしてふよ(山家) 上「かざりお

ろとむつことつきて歸り行人を霧も立へさてけり(新續古) 戀三「いろざりありあ

ひ見んよを重ねてり我むつごととの限りいられん(同) 同 治仁王 「むつごとよまどつ

きかたの深きよ何いそらん人のわかれち(新後) 釋教、中院入道右大臣 「夜もをがら月を

かためて契おきよそのむつごとよやまのれまき(敦忠集) 「むつごとよまどいひ

いそわかれあ一人のかたみいあづまかりけり(月詣) 七景 「ほどもかくあはむあ

たきやたなばこのまづむつごとのもどめあるらん(同) 同 季貞 「たかばこのまれああ

ふよのむつごと天の川をみかぞもいらとな

むつき 繡襦(源) やとり木 十 兒のみそいつへがさねよて御むつつきをぞごとく

からせ(詞花) 賀 正月ヨカケナリ 正月一日子うみたる人よむつきつかいをとて 伊勢「め

づらくけふさちをむるつるの子の千代のむつきぞかさぬべきりか。 繡襦ニ阪月

六帖上「うぐひそふゆでもりてうめる子のはるのむつきの中よぞありける

補(狹)あかでのむつきまつ、まれたるこゝちにて

むつび 睦(源夕顔)五 志たしくおもひむつぶる筋のまたかくかん覺え(源や

とり木)八十せちちのづけてむつびとまふべきもあらともの(同竹川)四この

君たちのむつびまるり給ひをさける(同)二十つねよみ奉りむつびざり親なれと

(同朝かは)十とかれ給へるところのむつびあをづらさきかよまそのあらめ

(同わかな)上又かく志たしめるべき中となりむつびをさしたまへるも(六帖)三

「風吹バ淀をむつぶる水鳥のうきねをのこやわがね渡らん(源よもきふ)十例のさ

しもむつびぬを(同末つむ)四 姫君の御あたりをむつびてこゝちにくる成なり(同

やとり木)九十ゆきりへりのかりやとりまのうむつひらるゝもさ過よ御けそ

ひを尋ね聞えらるゝ故になん侍める(同わか紫)五十 今のたゞ此のちの親をいそ

うむつびまつり聞え給ふ(同よもきふ)八 こちたき御ものづゝみなればさもむつ

び給そぬを(源わかあ)むつびり給へるも(同竹川)十 明くれむつびまほしう

おもひけり(榮花)むつひきこえ給へ(源桐つは)年ころなれむつびきこえ給へる

を(拾玉)五 「まよひ行ばさるかよてらせ山のそれ月よかれこゝむつび忘れな

むつび 体ノ語(源わかな)上九 えさらぬむつびよりもよこさまの人のあひのあはれ

をかむひとことの心よせ有のおぞろは此事よもあらせ(同)下四 朝夕のむつびを

かえさんよいとつゝまよき所の有しか(同)上五 百こをたのさまかたりておそ

いさて給へるむつびのちめをかりにこそあべめれ

むつものがたり(源をとめ)廿 一夜のしりうことの人々のまして心ちもさがひて何

まのゝるむつ物語をいけんとおもひをけきあへり(同わかな)下七 物ノケノカ

の又人もさかざり御中のむつものがたりよをましかたり出給へりよと物ノ

いひ出たりよまことおぞろ出るに

むね 旨(源蟹)八 いひもてゆけばひとつむねまあたりて菩提と煩悩とのへたゝりお

んまの人のよきあゝきさりの事のかせりける(濱松)三 つぶさなる事の旨を聞召

申させ給はんやよくぬん

むね 胸

むねいたし(源帚木)四十 いとこりおきをおぞろいむねいたし(同空蟬)九さ

るべき人々もゆるされとろしとかねてむねいたくなん(源竹川)十 中くよてま

らんむねいたく人ごらされる事もやあらんとむねいたかるべきこと(源東

や)十 七かの母宮をどのかよあらせて云々それのためさ御あさりおれどもい

とむねいたかるべき事なり補同うす雲四 見奉らざらんあといとむねいたかり
ぬべれれどむねいたきめ源東屋十ハタチ詞娘の給ふ人々あれど今のよの人の御
あへろさためなく聞え侍る中くむねいたきめをやみんのをむかりし

むねいさき病源やとり木八五十むねかんいさきあばいおさへてとの給ふ同帯木

四十むねいさくさまがよおもひとさる万十五あがむねいさく戀の夕きよ源
わかあ下五をあとところもかくいとくくるくのびてむねの時々おこりつゝと

づらひ給ふさまたへがたくくるけかり

〇むねをやむ源橋姫四十俄まむねをやとてうせよきとなんきくむねをやむ

源わかあ下五 曉がたより御むねをなやみ給ふ同さかき廿御むねをいたうなや
を給へば

むねそり古九十一人よあんのつきのあきけの思ひおきてむねそり火よ心やと

をり蜻蛉日記二 おのゝまはくといひつゞくるを一日のやうよもこそあれ一日
へワタリノウミセのらいたいとおもひつゝさすがよむねのりるを枕十二びん

あき所よて人よ物をいひけるは胸のいとどうはりなるなどかくあるといひけ

るいらへよ逢坂の胸のま常ま走りぬのみつくる人やあらんとおもへば榮花四

廿 閑院の大納言 云々三月廿日うせ給ひぬ哀れまいとさき事なりあそひらき今
かうあめりとさべき殿原むねそりおそろうおせさるゝ云々空穂國ゆつり中

十 それきゝまゝよくるき事もかくておきぬよさんのねのいとあらくくお

そろく覺えむねかんそりき

むねよてをおきたるやう源ゆき卅近江ノ君オトロ夢にとみいたる心ち

侍りてかんむねに手をおきさるやう侍と申給ふ上

むねよつこち源まき柱卅文人もみてうとてあるべしとつれなくもてか

し給へどむねにまつ心ちて

むねよむ拾戀五よみ「こひさのいろよいでよもええかくよいかあるときり

むねよむらん

むねとつれく百八一生のうちむねとあらまよいらん事の中よいづれよまさ

るとよく思ひくらべて日本紀竟宴「いつとものふとよむ人のたよやうよこれを

むねとぞともよのりとする續世繼六四むねと詩つくり給ふ事をこのとて補宇
治拾一その里よとりてむねとあるものゝゆめよ同むねとあるとをゆる鬼よこ
座よるたり

〔むねと〕(沙石集)九^上あまたの疵の中よかうべをつきとほして舌よつきつたりけるさむねと大事成けり〔補〕(山家)下「家の風むねと吹べき木のもとに今ちりなるとおもふことのも」と

〔むねとして〕(葉ヶウ)〔空穂 梅の花笠〕十女のおしをへての延命息災をむねとしておど

にわきての心のうちよそをのりへかき事也祈願せさせ給へ〔同 祭の使〕四つもの

を業として悪をむねとしてくまたかゞりよかとりよせよめるもの、云々

〔むねよりもあまる〕(源まほろし)三むねよりもあまる心ち給ふ〔同 わけまき〕八

云々とおもひつゞくるをむねよりもあまること、ちす

〔補〕むねたがふ〔著聞〕八もむねさがひてや候と申たりなるよ

〔むねつふる〕(源末つむ)五あいかうむねつふる〔枕〕三殿上の名どいめんあそ猶をか

しはれ云々耳をとなへてきくよ知るひとの名のりよふとむねつふるらんく〔補〕

〔枕〕六、十いかあらんと夢を見ておそろしとむねつふるよことにもあらぬあせ

かどしたるいとうれし

〔むねつふる〕(竹取)三くらもちの御子とうとんぐゑの花持てのやり給へりとのれ

りけりそれをかくや姫きよてこれに此御子よまけぬべしとむねつふるて思ひなり

〔補〕(空穂 さかの院)廿おとゞひむねつふるてあけて見給へバ〔枕〕七、廿むねつふるて

あはたれバうみよのものもか、せ給へせ〔源ととめ〕九かの御かさまよもえいか

せむねつふるておせ給ふ〔同〕廿かたよものもづのくむねつふるてもものもい

とでかき給ふ

〔むねつふる〕(空穂 磯ひらき)中、廿一所より奉りてむねなんつふる侍る〔源末摘〕廿

おしよまをまどき御しつゝ人を人々むねつふるておもへと〔同 帚木〕六などいふよ

おせ事れと心よか、りたまへれば先むねつふるて〔補〕(瀆松)二、むねうちつふるて

〔源夕ぎり〕二、廿むねつふるて一よの事を心ありてき、給はるとおせに〔同 まき柱〕

二よその物よ見えて、やみなまよと思ふたよむねつふるて石山の佛をも弁のお

もとをもならべていたゞかまほしくおもへと

〔むねつふる〕(源さかき)五十出給へんかたかくて明せてぬ御丁のめぐりよも

人々一々くならむたればいとむねつふるはくおせさる

〔むねつふる〕(うつは 藤原君)よこき御あゝろよむねつふるかしき事を聞給ひ

てももの覺え給へせ

○むねをつふる〔狭〕二、上世の人あまゆ、う見奉りあつかへばまいて母宮大

源氏物語 卷之廿八

殿をさの五月の夜の事かどをおぼしめたる、世なくむねをつぶし給ひける **補**源
まさ柱四ともはれは御むねをつぶし給へど

○むねこゝろもつふれ空穂 國ゆつり下冊おと、詞いさやそこで見つけ奉りし
むね心もつふれてよろづの事覚えざりしり 云々

むねくゝしき源とし姫五けいしきなどもむねくゝしき人もあがりければ同あふ
五。物ノ親の御方よつれつゝつさりたるものよめよ出来たるかどむねくゝ

一からせとどれあらはるゝ同タカヤ二あやう打よろずひてむねくゝしきらぬ
軒のつまかどよ同みゆき冊むねくゝしきかたのおとそ殿より申させ給さゞ

補むねの火夫八忠峯「くらきよよともはるたるのむねの火をおしこめもさる玉り
とぞ見る

むねのひまあ源紅葉賀十宮いにかかるよつけてもむねのひまあくやそからせ
ものをおもはは

むねのひまあ源さわらひ五おもひむをほるゝ事ども少づゝかたり聞え給ふ
よぞあよなくむねのひまあく心ち給ふ瀆松一むねのひまあもあけつゝ過し給

ふ同二むねのひまあくに

むねくる源さかき二十哀のみつきせねむねくるしうてまゝで給ひぬ

むねやをまるち狭四冊中かへはくゝむねやをまるち侍りてなん

むねけ胸氣。ムチノ病ナリ空穂たつのむら鳥十中納言此むねけよといふ心ちあんとて云々

むねふさがる源木冊ありがさきよもいとむねふさがる同タカヤ冊物のた
まふやうかれむねいふたがりて**補**同うき舟廿七いとよく似たるをおもひ出給ふ

もむねふたがれば

むねあく源みをつくし七哀がるものよおぼして年頃のむねあくバありとおぼせ
バ同紅梅九大方よ思出奉るもむねあく世なくりかき同手ならひ九四十世

にふべきものとの思かぬせかりぬるおそいとめでたきことかれむねのあきさ
る心ちぞ給ひける同桐つや十なき跡までひとのむねあくまどかりける人の御
覚えかかど 云々

むねさこが榮若枝五わかき人々はまた人の衣のいろよひにやおとらんまざ
らんのいぞむねさこがしるべし

むねさこぎ源タカヤ五あいかうむねさこぎて同紅葉賀十むね打さこぎていと
とろうれしきよも涙おちぬ狭三上六。母代アスカ冊云々といふし耳とゞまりて

何となうむねささぎて

むねさきて(蜻蛉日記)二長歌云々 今のなごもみお月のこかたよごぶるうつせとのむねさけてこそあらくらめ(同)二云々 思ふよもむねさくる心ちけ

むねひいれ(源 あけまさ)七十むなうとをうていかなる心ちせんとむねもひいけておぞゆ(狭)六十下いぬる名残もむねひいけさるやうよていと覺つかなう残りゆか

一ともよのつねあり

むねもあづかからせ(源 わか紫)四十俄にあさまうむねもあづかからせ

むねすこいひまありて(狭)二下云々 此世のりあさひいづれの折よりむねをこい

ひまありてさやうのよれつねの有さまをして聞え奉らん

補 むささけ(万)廿十「まいらをのよびさていかばさをいかの牟奈和氣あかむ秋の

そぎ原(同)八四「さをいかのむささけよかも秋そぎの散そぎよける盛かもしぬる

(續後撰)秋上「朝つゆようつろひぬべーさをいあのみねさけよる秋のそぎそら

補 むさかいら 棟瓦(職人歌合)詞

補 むなかとむさぶ(山家)下「里人の大ぬさ小ぬさたてあめてむなうとむさぶのべ

よかりけり

むさくるま 人ノヲ 空車 (賴政集)下。返迎 「のせてやる我あゝろさへとゞめ置りてね

さくもかへはむなぐるまりな(宇治拾)十三 其あさりよりたる下人をむな車をり

りよやりてつとて出んとるほどよ(枕)三十五よげあき物つき夜よむさぐるまあり

きさる(拾) 物の名 鷹飼のまごもこなくよつあき犬のをかれていかむなぐるまつ

布と補(著聞) 云々 御同車よて二條室町よたてられて御見物ありけり其後法成寺の

御八講よまゐらせ給ひり左府の御車をむさぐるまよて法成寺へやらせられけり

(空穂 藤原君) 卅むさ車よいをいそつみてもて來より

むなけ(夫木)十七 一池水ようかべるをいのむなげもてさむさけいさのあさがあや

いさ

補 むさこと(万)廿五 おぞろかよこゝろおもひてむさごともおやの名たつな

むなて 空手 (山家)下 一水たふ入江のまおもりりかねてむさてよるさみたれ

のころ

むさぎ (鱧) (万)廿六 一石まろあこれものまを夏やせよちふものぞ武奈伎取食

むさく(新古) 釋教 小侍徒 心經の心を「いろはのこそめい心のくやいさをむさくといは

るれりのうれいさ〇色即是空の心かるべー(源 あけまさ)七十むなうくなりあん後

坪神祇言集 卷之廿九

かふべき折の云々

○むかひきそら(源やとり木)六十 いひてもくむかひき空よのやりぬるとふりの
 みこそたれものがれぬ事ながら(古)一戀「我こひのむかひき空よちぬらしおもひ
 やれども行かこのなき(源うき舟)六十ながめたまふし行がたあらはむなしき空よ
 ちぬる心ち給へ(補)新古(春下式子)内親王「花のちりその色となくおがむればむか
 ーき空よ春雨ぞふる(同)戀二惟「あふ事れむかひき空の浮雲の身をしる雨のよ
 りかりけり(同)秋上攝政「くれかゝるむかひき空の秋を見ておぞえささまる袖の
 露りか(同)雑下 俊成「世中をおもひつらねておがむればむかひきそらよきゆるし雲
 同(釋教)寂然「雲それてむかひき空よそまがらうき世の中をめぐる月かけ
 村(拾員)廿「此さとこのむかひのむらね垣ねより夕日をそむる玉のせ柳(玉
 葉(春上)後鳥羽院「見わたせばむら朝とぞかすし行民のかまとも春よあふころ(同)秋
 入道前太「入かこの月の空さへひびくまでとちのむら衣うつなり(同)雜二
 政大臣 院御製
 「さよふけてやどもる犬の聲さかむらうづかなる月の遠かた
 むら(四)絹布(垂仁紀)赤絹一百疋(更科日記)卅ひき布をちむら万むらおらせさら
 させたるが家のあとへて

○補 ひとむら (宇治拾) 七、十 此布一むらとらせされば

ふたむら (忠見集) 十 きぬふさむら給ふと仰とたまひせければ云々 (後撰) 戀くれ

そとりといふ綾を二むらつゝとてつかはしける諸實「くれのとりあやし戀くあ
 りしむら二むら山もこえをかりにき

○三むら (宇治拾) 七、白くよきぬのを三むらとり出てあれあの男よとらせよ云々 布

三むらとらせされば(補)同(五)柑子とつが布三むらよかりたり

むらい(無禮)空穂(穢むら)下「いりよなめをさるさま侍りけん答云々 一夜のむらい
 ありもやいん更だ覺え侍らぬ仲をみだ酔こそをよとて侍りなめ (源わけま

き) 十 をかやまうてむらいなるを(同)夕かや(卅)かいらいたくてくるしく侍ればい
 とむらいよて聞ゆることおとのさまふ(同)常あつ「初むらいの罪のゆるされかんや

とてよりふし給へり(補)同(藤のうらこ)九 おきかいたく酔をよとてむらいかればま
 かり入ぬ

むらそぎ(夫)十一「そみよーのそまの村萩露もろしをさしな吹をまつのうらかせ
 慈鎮

補 (拾玉) 四 「わがこひの庭のむら萩うらがれて人をも身をも秋のゆふぐれ

むらとり(古)戀三、よみ「むらとりのさちよわが名今さらよことかふともある
 人しらす

あらかめや(源 わけまさ) 五 あかるくかりゆきむらとりれ立さまよふ羽風ちかくき
こゆ

補 むらがる (順集) 松の木は藤か、れりをとこそんをむらぐれるさり 云々(著聞)
十六 あつまりむらがりて

補 むらがりて (壬二) 中 「あらふく遠山もとのむらがいのたがのきばより雪をら
ふらん

補 むらぐをみ (夫二) 隆房 「かつらきやくめちの谷のむらぐをみとどえいはしにりぎ
らざりけり

むらたち (千載) 秋下 「立田山松のむらざちあかりせいづくりのこる錦をらま
補 むらたづ (万代) 隆房 「あまより友よびつれてむらたづのしほひのかたよと
あさりける

むらあがら (清) 廿 「むらあがらとゆるもとちの神な月まど山風のたぬなりけり
(六帖) 射恒 「秋ぎりのと、むもあらかん足引の山の錦をむらあがらとん

むらな (撰集) 中昔頼義の郎等、大瀬三郎近宗といふもの侍りむらあさけうの者
よて侍りける

むらく (六帖) 六 「むらくの木づさふもるよ成ぬら山のみよくうぐひをか
くも(古) 長歌云々 庭のおもむらくをゆる冬くさの云々(源 脚屋) 三 もとちのい
ろくこさませ霜がれの草むらくをかうとえわたるに(同) 五 十はるの
もてあそびをわざというるて秋の前裁せむらくをのたませたり(玉葉) 四 雑
永福門 「とりべ山烟の末やこれあらんむらくをさき空のうき雲(風雅) 春上
院内侍 土御門院

「春もいまたあさるさきその跡見えてむらくのこる野べのいらぬき
むらく (源 竹川) 三 故殿のなさは少くおくれむらくをさききたまへりける御
本性よて心おられ給ふ事もありけるゆかりよや誰にもえあつかう聞えかよひ給
えせ 注 心ノムヲム 補 (馬内侍集) 「つき草れうつこ、ろやいりあらんむらく
くも成ぬべきかな

補 むらくさ (拾玉) 一 「やどさびて夏も人めのかれよけり何いなるらん庭のむら草
むらくも (夫) 九 三の 「雨をよぐとねの梢をかむればむらくもかゝるせものこゑ
てゑ(玉葉) 冬 永福 門院 「風のおとそけくわさるこをゑよりむらくもさむきみか月の
空(同) 治部 卿 「あらふきこのそちりかふ夕ぐれよむらくもきはひくぐれふるなり
(風雅) 秋中 右大臣 「いまよやまたる、月ぞよふらむらくもいろき山のものをら

補 むらまつ(赤染集)「すみのえのさしむらまつ陰とるみ波よるりを人の見さやハ

むらで(空穂 藏ひらさ)九色々此紅葉うそきよさむらでよまどり(伊勢集) 十藤のまなけふとつるよりこむらさきむらでよ色ぞふかくかりぬる(枕)五うそやうのさうーむらでのいとてをかくとちさる

むらで(夫)九寂蓮「あきとむる山下水の末さえてりせよがる、せみのむらで(同)為實「宿よかく梢のせとのむらでゑの夕日のかたもところせきまで

むらさ(紫)古上(六帖)五よみ人「むらさ(紫)古の一もともゑよむさし此草ハからあわれとぞみる(古)上業平(伊勢物)「むらさ(紫)古の色とき時のめも

るよのかる草木もわれざりなり(拾)物名「紫のいろよのさくあむさしの草のゆかりと人もこそし(六帖)五下むらさき「ちらねともむさしのといへばかまた

れぬよしやそあそむむらさ(紫)古のゆ(万)十六「紫のねもふよあの春のよ君をかたつ、うぐひそなくも

むらさ(紫)古り枕)八廿大夫権守をといふ人の云々庭いときよ紫革十ていよをかむわさして

むらさ(紫)古のよ庭紫(千載)序百敷のふるき跡を紫の庭玉のうてあちとせ久かるべきとぎりととぎさこまひ

むらさ(紫)古のちり(右京大夫集)九「むらさ(紫)古のちりをかりしておのづからとあるところよもゆるさわら補長方卿集)「むさ(紫)古の、すくろが中のあたらびまぶうらわかーむらさ(紫)古のちり

補 むらさ(紫)古のくも(後拾)哀傷「むらさ(紫)古の雲のりけてもおもひきや春の霞になして見んと(新古)寂蓮「むらさ(紫)古の雲路よさをふ琴のねにうき世をさらふと

ねの松風(續日本紀)九長歌紫雲棚引豆云々(夫)秋二「紫の雲とぞ見ゆる月影よ水のおもてる岸の秋(拾)雜春「藤の花宮のうちにはむらさ(紫)古の雲うとのとぞあ

やまされける(同)公任「むらさ(紫)古の雲とぞ見ゆる藤の花いかるやどのゝるーなるらん(新古)賀兼盛「むらさ(紫)古の雲うちをびく藤の花千とせの松よかけてこそ見れ

補 むらさ(紫)古め(村雨)新續古夏みか月のあろ風をく村雨打をぎさるあた萩の戸のかた見すぐがたくて後深草院「またさか萩のたを露ちりてをく

かりぬ村雨のそら(源)さかき五十雨よかにさろくうふりて神いたうなりさこと曉よの、きんさち云々神かりやみ雨少しをやみぬるとよおとわた

り給ひてまづ宮の御かたにおいしるをむらさめのまぎれにてえしりたまぬ

(夫) 順徳院 「神無月あらしよまどるむら雨にいろあきたれて散もみぢかを(續古) 下秋

中務卿 「空もなやあきのわかれやをいむらん涙に似たるよへのむらさめ(拾愚) 上

親王 「あづまやのひさしうらめし郭公まつよひ過るむらさめの聲(公任卿集) 夕立の

たるよ人々歌よとけるよため 「夏の日ふりしもとけぬ村雨は草のこどりせふり

くそむらん(玉葉) 夏百首御歌の中 「あやめふくりやがのきを風過てとろよお

つるむら雨のつゆ。玉葉秋あひい(源まほろし) 十 「あき人をいのおるよひのむら

さめにぬれてやきつる山をとぎれ

補 むらぎく(榮花) 「あがれ行末の世までよつきもせせさしてよへるきよ此むら

ぎく(經信卿母集) 云々めもあやかりや宿のむら菊(拾愚) 上 「又もあらト花より後

のおもかたよさくさへをいき庭のむらぎく(上東門院菊合) 「月けの風にみたる

るむらぎくのあびくかよよ色ぞあへゆる

むらぎえ(源うさ舟) 舟垣のもとよ雪むらぎえつ、今ものきくもりつゝふる

むらぎみ(空穂 吹上) 下 廿むらぎみめしておほあみひりせかど(山家) 下 「岩のねよ

かとおもひきもをさうきてあひびをかづくあまのむらぎみ(夫) 十六 「さかがみや

そのむらぎまはあらかくにまづあどろ木よきてどうち見る(和名) 二 漁父 一 云 漁翁

無良 岐美

補 むらしは(拾玉) 二 「みりりするかた岡山の村柴よふるべかりなりなふのあられ

り(同) 六 「むらしはにさゞに立なり櫻がり花ちるのべれ春のあはれの

補 むらそよき(嘉喜門院御集) 「露ふかき野となる庭のむらそよき人あをいけね秋

風ぞふく(拾愚) 上 「むらそよきうゑとむあともふりよけり雲をちかくまもるす

みろよ(山家) 上 「そよいづると山がそをれむらそよきをまがきにあめてかあふ秋霧

(續古) 冬保 「野べのむあしもがれよなりむらそよきすのりよ見えし里もあらひよ

(玉葉) 秋上入道前 「秋山のふもとの原のむらそよきはせゑかたより秋かせぞふく

(万代) 秋下前攝政左大臣 「さよふけて露やおくらん村薄志のにはほのめく有明の月(同) 冬法

入道前關白 「野べ見れば尾花もえぬむらすよきり葉が末よ霜を置ける

補 源末つむ(廿九) 廿九むと打らひていと口おもけあるもいとほしけれバ

むく。皮ヲム(著聞) 十 石泉法印祐性鞍馬寺の別當よてかれよりす、を多くまうけ

たるぞある人のもどへつかのそとよめる 「此をいくらまのふくよてさふらふ

ぞされバとてまよひのめめなよ補(宇治拾) 一 廿このいもをむきつゝをきり

されば

ひく 向(欽明紀)「から國のきればよたちておほさまのひれふらそやまとへ武岐底
(源うき舟)五十ふとよあゝろいれてとよおもむき給そぬ(玉葉)戀四新院御製「う
き事もわが身にむらておとこりとおもひなはにのうらそもあし(風雅)戀四「我
心うらそよむきて恨むてよあされになれバ一のびがたきと

ひくい 報御禮ニトイフコト(宇治拾)九此むくいに物よくあらせ奉りてよき
又悪キ報ニモイフ 男をよあひせ奉るべきなりといふとなん見える(源かしの木)十世とともにおそろ
しとおもひし事のむくいなめり(同さかき)七かさくおぞしおぞめざるよとよ
のむくいせんとおぞまをべかめり(和泉式部集)下「われ故し人の中さへさゆめれば
そのむくいさへおそろしき哉(古)誹諧よみ「我をおもふ人をおもひぬむくいしや

我をおもふ人の我をおもひぬ(土佐日記)國よりとめて海賊むくいせんといふを
おとを思ふうへ(源わかし)七此源氏の君まことよおかそおとなきよておくそづ
むならバかからせ此むくいありあんとおぞえ給ふ(同タタリ)廿。アサリさるいみ
トきむくいをもうくる物なる(續紀)廿二厚恩母(成世)酬盡奉事難之生子乃八十都
岐爾仕奉報久倍在(其之)源みをつくし(一もの)むくいありぬべくおぞしけるを

(拾愚)上「いまのまの關の藤なまたえせどもくよむくいんためをこそおもへ

(月詣)六皇太后「とせませうらえて過むくいにとてあれよりつらき心あるをよ

(新後)戀二「つれをさのうきにつけてもかこつかを世々のむかしの忘れぬむくい

よ(續後拾)戀二「されの世のむくいおもふもつらき身よ又あひしあんとてぞかあ

しき(同)長舜「おもひこび猶こそうけれさきの世のむくい人のとがあらねども

(同)同宣旨「さのみよむくいあら下うき人の心よりこそつれあかるらめ(新

後)戀二「されのよよ我よ心やつくしけむむくいからせのあゝらましや(躬恒集)

「よとよもよ人を忘れぬむくいしやねふのうれしくあひ見をむらん(新續古)戀二

重「つらかりし今もむくいし後までもむかす中のちきりをぞしる(拾玉)六「か

くむかりふかき心のむくいし君が八千世よあそさらめや(續古)戀四土御門院「く

れたれよよの契りも忘れけりうきふしあき戀のむくい(續拾)戀二宗尊王「か

くこひんむくいを人のおもひでや後の世しらすつれあるらん(同)戀三「あぬを

かりをし別の暁やいのちよかへむくいなるらん

補むくろ(著聞)廿二むくろし手ばしおひたりける(稜威道別)身中ハ重遠云軀

殼也と云さるさる事う今も衣の袖の無きを身せると云是も同音

むくろでめ(枕)六。十。方弘ガむくろでめより給へといふを五体でめよとあんい
ひつるといひて又笑ふ

補むくと(今昔) いけよへ男むくとおきて

むくさん 無官(友則集)詞 無官よ侍るよをまいての申して

むくつけ 無骨ニ(源)二。句ヲ右近カナル人々ヲイッ。こだち詞 あかむ

くつれやこいた山いとおそろの山ぞか例の御さねもおいせ給ひせやつ

れておそいまけんよあかいとやといへ(同)かし木)十宮のさをかりひとづ

かる御さまよいてむくつけうからぬことのおそろうおせされけるよ御ゆな

どもきまゝめさぎ(同)タヨリ)十るざりいる人のかげよつきて入り給ひぬまど夕く

れの霧よとぢられて内にくらくかりよたるをせありあさましうてとかへりたるよ

宮いいとむくつれうかり給ひて北のささうのどよるざり出させよまふと(同)わ

か紫)四十わがきまゝいとむくつれういかよる事をらんとふるまき給へと(同)タ

かは)八昔物語なまよこそこのゝることいさげといとめづらかよむくつけいれと

(同)廿今まよなのり給へいとむくつけいと給へと(同)藤はかま)十けよ宮づの

への筋よてけさやかあるまどくまぎれたるおせえとかいこくもおもひより給ひけ

るかかとむくつけくおせさる(同)のわき)三くれぬまよよ物もみえぞ吹まよと

ていとむくつけいれまかういかとまゐりぬるに注オソロシ(同)玉かつら)廿。三

ガ佛ヲガミ あかかま給へ云々 大貳のみさちの上の清水の御寺の觀世音寺よ參り給

ひいさすひいさかどのとゆきよやいおとれるあかむくつれやとて猶更よ手引

まなたぎをがと入てせり注オソロシキヲハナ(同)わけまき)十。大君 屏風をやせら

おしあけて入り給ひぬいとむくつれくてかからはかり入り給へるよ(同)手習)三。浮

子のはをまんとせるとむりありけん目も鼻もなりける女鬼にやあらんとむく

つけきを(空穂 藏ひら)下。十。源侍 そもあかかま御心よまらせたんめる御世の中

を仲忠 あかむくつけ露まよぞあさといふ(同)下。四。あてにらうくしきひといへ

とあされさる所よかすりあるすまひあどしてさうくしけなるをみていあかむく

つけごりいたつけごづらひとやならんとおもひまどひてあさりの土をまよまま

(同)吹上)三。あて宮よ奉り給へばあなむくつけあまふさる物をかもておのせると

てひきやりててまふ(同)菊の宴)下。六。北方ノ住家ニ思ハズ 二所ならびたち給

へると見給ひて北方 むくつけくまのわたりにありつらんあかかま人々あいひをと

て(伊勢物)五十 六段 むくつけき事人のゝるひこといおふものよやあらんおのぬもの

やあらん今こそめとぞいふる○契云俗ニムゴキと云詞也(源花の宴)五ふと袖とらへ給ふ女おそろとおもへるけしきよてあかむくつれあいたそとの給へバ(同玉かつら)八大夫のけんとして肥後の國よの族ひろくてりこよつけての覺えありいきはひいめしきつもの有りむくつけき心の中よいさかきさる心のまどりて注タケキ心中ニモ好色ノ心ハアリト也(補敦忠集)あななつ人むくつれし物をさよいととあれば(大和物)いとむくつれしとおもへどめづらしき事あればとひさく。文雄云俗にきみわろ(源わかき)下六あさましくむくつけくかりて人めせどちりくもさふらねばきつけて參るもか云々と一月よをへてくちをしくもつらくもむくつけくもあそれよ(同竹川)五ぬをともどりつべくむくつれさまでおもへり(宇治拾)三いとどう身のちのらつよく心たれくむくつけきあら武者の

むくつれ(蜻蛉日記)四内ヨリ詞いとかうむくつけくあるあたりの内なる人よまづ心なく侍るをといひ出されバ云々

むぐら(源よもさふ)五葎の西ひむかしのまかをとぢたるぞたのもしれと

むぐらのもと(源帯木)八世よありとあられさびしくあられらんむぐらの

門(同竹川)四十かくいと草ふかくかりゆく葎のまをよぎ給ぬ御心をへにも云々

補むく(著聞)十七毛むくくとおひさるほそきかひなせさ入て○或人云万葉よつ、トもくさく又木丘開道乎かど有、紀よ蒼をもくとよめり注ニ草木の繁き事とせり本語の是より出たるるべし毛の長くむらくと生るる犬をむく犬といふるさくおそろしきけしきよりれをろしき意とも轉せる也

むくく(源タカハ)卅此人をむかしくあてん事のいミドくおせさるよまをへて大方のむくくしきことへんりたか(同あつまや)十六かゝる人の供人あを心のうたてあれなさいひあへるもむくくしく聞からのぬ心ちし給ふ(更科日記)五十

心もあらぬ人をやと奉りてかまもひきぬれなばいよまをべきぞと思ひてえねでまのりありくぞかすとねさるとおもひていふさくよいとむくくしくをのしムクツケキチ重(補雅譯)ミグルシイ、オソロシイ、キミガワルイ、尾張ノ田舎の詞にムツケタと云即チ是なり

補むくの(續千)物名とくさ、むくの(著聞)五、むくの木云々むくをとりて食けるよ

補 むくめく (今昔) 大小の蛇いくらともいれど頭をさへけてむくめきあひたり

(空穂 樓の上) 六十みのむいのやうよてやむくめきまらん

むや / のせき (夫) 廿「あづまぢのとや / と祈りの曙 / 不と / ぎはなくむやむ

やのせき (同) 「もの / ふのいづさ入さ / 志をりそるとや / と祈りのむや / のせ況

むやのたまぐり (小侍従集) 「よそよこそむやのたまぐりふと / かあふといあまのぬれぎぬと / 月詣 (五宗) 光女 「よよりあらむやのたまぐりふと / せよ遙かるとの浦にむむとも

むやひ (夫) 卅三 權律 師教香 「とづもせよも / ちのふねをむやひつ / よ / きをにかして風ぞあぎゆく (堀百) 思 俊頼 「むやひをるかまの / 不をいの / へえ / ばあを / さまの / せ / 舟ゆき

もわかれめ (夫) 卅五 遊女 「波のうへ / へく / だに小舟のむやひ / して月 / よう / さい / い / も / ぞ / あひ / き (弘安百首) 俊頼 「むやひをるかまの / 不づ / かの / へえ / ば / こそ / あまの / とも / 舟 / ぬき

もわかれめ

むけ 無碍 (つれ /) 五十 九段 おのづから世をむさがる / 似 / ざる事も便 / ぶ / れ / ば / かの / なるらんされば / とてをむける / かひ / な / さ / ば / かり / あり / ば / かつ / かの / せて / 一 / さい / せん

の無下の事也 / さまが / 一 / た / び / 道 / に入 / て / 世 / を / い / と / せん / 人 / こと / ひ / 望 / あり / とも / い / き / は / ひある / 人の / 貪欲 / 多 / き / よ / ける / べ / から / せ (源 / さ / か / き) 三 九月七日をかりなれば / 無下 / よ / け / ふ

あまとおおせよ (同 / 夕 / さ / り) 廿 おも / ん / 所 / を / む / け / よ / せ / 給 / ん / ぬ / よ (蜻蛉日記) 一 / 子 / と

もあまたあり / と / き / 所 / に / む / け / ぬ / と / き / あり / れ / ま / して / い / か / せ / り / と / お / も / ひ / て

とふらふ 云々 (同) 二 むけ / によ / な / かん / より / へ / して / あり / ば / 尼 / モ / ナ / リ / テ / ナ / お / せ / つ / り

なからぬ / ほど / にか / よ / ひ / つ / 云々 (源 / 帚 / 木) 卅 一 む / け / よ / 若 / ら / せ / いた / ら / せ / も / あ / ら / ん (枕)

三 水 / かけ / の / 池 云々 む / け / よ / な / くり / とき / て / あり / ば / こそ / さ / も / つ / け / め (同) 九 中納言大納言

大臣 / など / よ / かり / ぬ / る / り / む / け / よ / せん / か / た / かく / お / せ / え / 給 / 事 / の / よ / さ / さ / よ (同 / 夕 / か / ば)

四十 む / け / よ / よ / ころ / や / う / よ / 給 / ふ (同) 十 あまり / む / け / に / 打 / ゆる / べ / 見 / 放 / ち / たる / も (同 / や / とり / 木) 廿 九 む / け / よ / いら / へ / 聞 / え / ざ / ら / ん / も / う / して / あり / ば (同 / わ / づ / 紫) 卅 二 此 / 日 / 頃 / む / け / よ / い / と

この / も / 一 / 夕 / かく / から / せ / 給 / ひ / よ / され / ば (拾 / 物 / 名) ケ = コシ 「忘 / れ / よ / 一 / 人 / の / さ / ら / よ / も / こ / ひ / き / り / む / け / に / こ / と / の / お / も / ふ / も / の / から (空穂 樓の上) 下 五 世 / 中 / され / 一 / り / 給 / ふ / 人 / も / む

夕 / よ / み / ぬ / の / 心 / ち / む / つ / か / 一 / き / 時 / の / い / で / や / い / か / 有 / けん / と / み / ゆる / も / の / 也 (源 / さ / か / き) 三 此 / 筋 / の / む / け / よ / な / く / の / こ / と / を / ち / の / ま / 下 / ら / め (同 / や / せ / り / 木) 卅 五 志 / の / び / て / わ / さ / り / せん む / け / よ / を / む / く / さ / ま / の / あ / ら / せ / と / も (同 / よ / も / き / ふ) 十 む / け / よ / く / 一 / たる / 女 / を / ら (盛衰) 卅 六

木曾の信濃にとりても南の端都もむ々にちりれば(沙石集)五、上和歌の道御心得
かきあそむはよおやえ(うつねとし蔭)六十なくくの給へばもづりさいせん
かたあなれそむはよ聞えざらんわかしくいれれば(長秋詠藻)中志のびたる所
いきたりけるよ人めいけくよも無下よあはぬべかりけるをとかくかまへて歸りて
つとめてつあひける(源 帶木)廿むけよおもひいせれて心せそりりぬれば(同)卅
む々に世をおもひいらぬやうに(同)卅むはよいらぬいさらぬもあらん(同 柏木)
廿いとさきえいるやうよ給ひてむはまたのむかたをくかうなり給ひよさり(榮
つゆみ花)十む々に夜よ入ぬれば(宇治拾)三念佛してきえいらんとをむはにがきり
とみゆるほどに(源 タウは)五十九むむはにけるまときわらひ(補 榮 若水)もとより酒
のむ人なればいみづくひさせ給ふるとよむはよるひさり(大和物)六近江守いか
にきこめいさるよりあらんとをさきおそれて又むはあさて過したてまつりてん
やとて歸らせ給ふ(枕)十二、「ちかへ君とそつあふまのかまかけてむはに瀧名のそ
い見ざりきや(和泉式部續集)「ありとこそいふをかりよあらねどもむはよなり
とい誰かいひけむ(源 むふ)十一むけよおくれさるはぢのなきと(宇治拾)十五、むは
よものもおおせられぬおもくおそいつるよ

む々の(源 うす雲)廿いまいむ々のおやさまよもてあ(補 源 わかな)上、廿む々の
そるにまゐり給へり入道宮よをさしのおされ給ひ死か

むぶづせかい 無佛(宇治拾)八、法師さる無佛世界のやうなる所歸らトこよる
なんとおもふ心つきて

むで 無期。デモ也(枕)九、二いつうとまつ御社のうたよりあさきぬをどきた
る者どもつれさちてくるといかよ事なりぬやをといへばまたむでをといらへて

(源 柏木)九 小侍 例のむでよむかへすゑてをさへいせまろしうしたま
ふを(狭)十九 上四 ひとひもまかをむでよさ、かせ給ひよ明る人もあかりよる

おひいまをるといとひ参らるるか云々(源 うき舟)七 枕のやうしうきぬるをかつ
ひいかよとるらんとつ、まいつとめてもあやしからんまをと思へばむでよふいた

り(瀧松)四 其母君のけがらひよあもりてむでよ其山よあとをさえてをこ給て
(源 やとり木)九 十 いとあやうくる一はよのせさせ給へれば云々けさむむでよ

御心ちさめらひてをといらへておこせば(大和物)六云々といひて入ていと久しか
りければむでにまちたてりける云々(空穂 初秋)上卅 けたをまひのかちまねの

定まらん事いとむでかり(長嘯子瀧のまさこ)八月廿七日の夜おるべし亥子勉をか

りむでよ門をたゝきてかゝこまり文をもてきぬ 長嘯子ノ文ニハハヒコチカウツカヒ
テアリ中古ノ体トハタカヘリ
 (寶篋印陀羅尼經)死墮地獄受苦無間免脫無期(とりうへそや)御覽せまふべし
 むでよ出給ひぬぞ(源やとり木) 九十けさひむでよ御心ちためらひて(續世繼)四、十
 門とさゝきれれどむでよあざりければ(宇治拾) 五、十院の御使は候かといへば申
 候んとしておくへ入りてむでよあるほど鈴のおとさきりかりさてとばかりありて
 (同) 九十一御前の布とりよて見てこと云てまゐらせてはりむでよみえざりければい
 りよあういおをさまかど(更科日記) 十六竿におうりてとみよ舟もよせせうをふ
 いて見まひいみふるそとたるさまなりむでよにえわたらでつくんと見るに(宇
 治拾) 七、十。かひもちひひーくとたゞくひよくふ音のいれればをべなくてむでよの
 後よえいといらへさりければ僧たち笑ふ事限りか(落くほ) 二四日よりいとまる
 といひーと思ひてむでよふせり(同) 二中將殿の御車さめのはいそのよ引立てむで
 よ立さまへるよ(大和物) 六、廿いとひさうりれればむでよまめどてりなる
 むこ(聾)(古事記) 十五問其聾夫曰云々(源タカヤ)四むこの三河のかみ(同竹川)七人
 のむこよなりて今の心志づるよもえ給ひぬぞ(同) 手習)廿尼君の昔のむこの君(補
 (新拾) 三年でろかたらひる人の此ゆふべ人のむま成べいとさきて)

むことり(空穗) たつのむら鳥)四八月十三日聾と給ふ中將たち心よもあらで聾
 とられ給ひぬ(同) 國ゆつり)十四只今むことりもいつべき娘のやうよていとめてよ
 く(催馬樂) 我家大君さませむこよせん(源やとり木)八十よ人のやうよむまとり
 いそがせ給へるたぐひのそくやく有けん(落くろ) 二かたちいとよく鼻いとど
 いたなるをむことり給へるとの給へば(補) (落くろ)一むことりなるよいとほした
 あさこ、ちをべ(枕) 七九又人おをいどとたる中に入れられてむこよとられたるも
 我のとおもひぬべ(同) 三、十いみどうあたて、むことりたるよいと程なくまぬ
 むこの云々

むでんのぎやう 無言(新後撰)雜上無言の行侍ける比郭公を聞て(方丈記)こ
西行
 とさらよ無言をせされとも一人それバ口業ををさめつべ

むさい 無才、雅言(空穗藤原君)あかあるをさえある者いづめ無才のをのこ先よ
さえちり

たつ(同) 菊のえん)下卅。宮アコ君詞師ノ季房ガ宮あこ君も物の師とよかくの給
五。コチアア宮=申玉ツ所
 へばこそいと無才よ成ぬべければとの給ひて(狹) 廿一上公よ仕まつり私の身の爲男
廿四
 のむまよむさえよ侍るいとくちをいさ事よ侍れば其のたさりりぞかこのやうよ
 見あかせとやいひーらせ侍りん(源) 帯木)廿九かつかーささいーと打たのまんよ無

さえの人をまごろからんふるまひおと見えんよそづかしくなん見え侍りイナシ

むさざり 貧(源夕きり)五十夕の露のりゝるそでのむさざりよ

むさざる (源夕かは)卅いと哀し朝の露にことあらぬ世を何をむさざる身のいのり

にりと聞給ふに **むさん** 無慙(空穂國ゆつり)中卅。籠居云々とかくくの給ひて詞是の只ならぬ折

からねばきぬをもぬぐべきを年比行ひ出さるほどけさりありいくなる迄こそ山

でもりのどの給へばいかでかむさんの人の給むりて失ひ侍りかんとおそろしき

事と聞ゆれば(盛衰)九廿あかむさんいりあるものゝ罪せられて又此島よそかたる

らん(同)七、八、十たまゝ入壇くさんちやうせんとそるを障けまること此むさんさよ

(同)卅七、あかむさんの人共やいつまで命をいむらん(源手からひ)十これむさんの

法師までいむ事の中よあぶる戒のおおからめど女の筋よつけてまたそりとりとせ

あやまつ事を(迦延論)何名無慙答曰可慙不慙可避不避不善恭敬不善往來此云無

慙(百法論)無慙者云々輕拒賢善不恥過惡 **むさう** 無慙。トサンナ音(宇治拾)十、廿泣まどふさまいとくいとトうあそれよむ

さうは覺えしうどもさいひいていかせせん(同)十、廿かゝる罪そのとつくりしむさ

うは覺えて(同)七、七、七いさう房さて今うちりへせくとさなぶそのときよつとひ

て見る者ども一こゑよむさうの申やうりなゆゝしき罪にも候さておとしませく

といふ時(同)十、十、十かゝる罪をのみつくりしがむさうは覺えて

むさゝび 鼯鼠(万)三、十むさゝびの梢もとむとあゝ引の(同)六、廿「三國山木ぬれよ

すまふむさゝびの鳥まつがごと我まぢやせん(同)八、卅「まはらをが高圓山をせめ

さればさとよおりくるむさゝびぞをれ(夫)廿七「さよふれてさびしくもあるか高

圓のをのへおりくるむさゝびのこゑ(和名)十八、鼯鼠和名毛美俗兼名苑云狀如猿而

肉翼似蝙蝠從而下不能從下而上云々(補)宇治拾)火をとめてめんく見ければゆ

ゆしく大かるむさゝびのとふり毛をせむおとあかるよてぞありける(拾

玉)「谷川のおとあ月をむと山べいれさへさめるむさゝびのこゑ

補 むさゝあぶと(隆信集)「うるさといふごよつらゝむさゝあぶとあねといか

ておもいざらん(同)「とそぬごよつらゝときゝむさゝあぶとあねといかけて

おもふべきなり **むさ** 向。東西(源うつ蟬)四今ひとり東むきよてのこる所かく見ゆ(万)十四、い

づちむきてりいもがなげかむ(同)句宮)十志ん殿の南のひさゝよつねのこと南むさ

よ中少將つさわとり北むきよむかへてえかのそこたち上達部北御座あり(枕)六奥
よよりてひがーおもてよおをそればあけい舎の北よそこよりてとんかむきよ
おむは

補 むぎいひ 麦飯(著聞)十六

むぎなり(著聞)十八 索麵

補 むきく (万)九 卅 ぞふつたのおのがむきく天雲のこかれーゆれば

むぎのあき 秋 (夫)八 俊頼 「みそのふよまの秋かせをよめきてやまほとぎは志の
びあくかり(同)しらす 送るてふ蟬のそつこを聞より今今と麥の秋をとりぬる

(朗詠)五月蟬聲送麥秋(加茂保憲女集)五月せこの聲むぎの秋をおくる「冬をへ

てともよおふるむぎの秋云々

むきて(枕)六 ひさーの柱にうろをあてこかたさまむきておそーまは(源 桐

つは)七 殿のひんがーのひさーひがーむきよいーたて

むめりのあやめ 六日の(新六)一 衣笠 いかせん今六日のあやめ草ひく人もあ

き我身也けり(夫)七 (平家物)十 志度合戦「六日のあやめあそぬ花いさかひそ

て、れちぎり木(信友云あそぬ花の宴は遭ぬ花也宴をえといへる例の堤中

納言集の詞書よえとり貫之真筆よもさざかよえとく入れたりとどかたるの假名
たがへれど平家などよて論よたらせかくてえあぬ花と花の宴行ふ時よ
いまたよくもさうで後日よさうりよかりたるよ也○こある人の間にをさるち
ことへたる趣也

むー 虫 (和泉式部集)「かく虫の一つ聲にも聞えぬのころ」物やかなき補

(宇治拾)三 廿 春つおた日うらゝのかりけるよ六十斗の女れありたるが虫うちどり

てるさりけるよ(夫)十四 延喜七年 云々 忠峯新和詩序云ひるのひくら虫をもとめ

夜のよもそからそらのとををとへのへち或時よ山のよ月まつ虫うかむひて

さんの聲よあやまさせある時よの野への鈴虫を聞て谷水音よあらかそれ云々

むーろと 席田 (催馬樂) 席田 むーろ田やむーろ田のいつぬき川よやむつるの

むーとと 虫 嘴 (枕)十一 月にむーを思ひ出て虫をみさるあそりとり出て(拾) 戀 雜

よみ八「理木の中虫をむといふめれべくめちの橋の心してゆけ

むーよとりにも(万)三 廿 「此世にーたのーくあらばあんよあぬ虫よ鳥よもそれの

かりあん

むーりわた(宇治拾)十 六 顔とそりといあかくしてむーりわたをささるやうにい

らかく白きが毛のおひあがりさるさまにて

むーる 鳥の毛に (平家勘文の卷)庭草むーりよてさふらふと申は(宇治拾)四、十いさ此雉

子を云いねあがら毛をむーらせければふさく^ととるをおさへてさむーりよむ

しりねれば(空穂さかの院)六、四十きぬわたも見ればいと多かりをたちも皆給りて

引ちらしてむーりあさは**補**(宇治拾)四いとあさなかけにむーるものもありむーり

もて(著聞)十六、四毛をつるりとむーりてねり

むーよ 墓所 (平家物)三、廿御墓所へわさし奉る時の作法の

補 **むーたれい** (山家)熊野二「くまのむさしきあといあらどかむーたれい

たのそあぶあゆみの

むどん 或ハ云ムシンハカケカ (落く)六、十。君詞うたて心かーとええられさるや

うよあそ句人よーられぬひとむどんあるこそよけれとて物一はよおもすたり

(狭)上。笛 心をどめて人に耳をらさせ給いせかどあればよろづよむどんに物を

さまトき人さまにやとぞおしそりられ給へど(源わか)三、柳の葉をもよさびあて

つべさとねりどものうけたりていとるむどんありや(同)三、十我よて思ひる

にああ情あうらめしうもど其折よこそむどんあるよやもーいめさまーかるべき

きとへけやなうかとも覺えけれ(同)帝木)四、十いふかひをきそくせかりければむト

んよ心つきかくて止さんと思ひさてさり(同)と夏)五、少將侍従などるてまうでき

さりとかたりあます一は思へると中將のいとトほうの人よてゐてあぬむどんを

めりかー〇少將侍従ナドハ足トクカケ走りテモ來タラント思ヘルヲ夕霧ノ中將ノ

物カタキヨリ引ツレテ來ザリシハ心ナキコナリトナリ

むどん (とりかへそ)三、ほとけのあらもれ給へるやうある御あたりよともかくも

あらんこといとむどんよびんなかるべ**補**(源)帝木)九、むどんよ心つきなくてや

みなんとおもひさてたり(空穂)國ゆつり)中、七政頼子ともあまよもて侍れと云々大

衆よまどそらんよおもたよく侍るべきもなく人のあそびせん所に草うり笛ふ

くさかりれこゝろどもよていとむどんよて侍り

むどん 無心。心ナシノ(源)玉かつら)四十紫ノ君をよそ今の心ならまーかばさやう

よもてあして見つべかりれいとむどんよーあしていわさぞあーとて笑ひ給ふよ

(枕)七、行成 女をこーわれのと思ひたるの歌よとがましくぞあるさらぬこそかこ

らひよれ丸かどよさる事いそん人のかへりてむーんからんかーとの給ふ

補 **むーのたれぎぬ** 並 **むーあを** (夫木)九、夏部三、正三(歌林拾葉)「草ふろとむーの

されぎぬ結あけてとはりこづらふ夏のたび人(續世繼)十。シキマノウ。小大進
 詣テ還道中ノ淀のこさりよやみゆきなどのよそひのやう道もえさりあへぬ事
 のありけるが今日まん所の京よ出給ふといひてよそにものともおもぬ事のい
 ひいらせ見えけるなどむいたれさるをさまよりや見えけんふみを書いて京より御
 ふもとてあるをえれば云々(新撰六帖)五。戀衣笠。ものへたてたる「むいたる」あづ
 まをとめがすきかたよかざりおそくてゆきわかれぬる(名義抄)。幘ウチカケキヌ
 ムシ幘。又幘ムシカツク、ウチカケキヌ(色葉字類抄)。幘ムシ式一。條。縹ムシ。縹ムシ。縹ムシ。(字鏡集)。縹ムシ。
 徒候反。トアリテ訓ナシ。濕字字書見アタラズ索ベシ(林逸節用集)。門。縹ムシトア
 リ縹ムシハ桌カラムシニテ麻ノ類ナリソナムシ見ヘルナルベシ。幘ヲ訓ルハ名義抄字類抄ト合
 (一遍上人書卷)。(日高川書卷)共。ハ省ク
 これむいのたれぎぬ也むいとノミモイヘルト上ニ擧タル証文ミルベシ。夏帷ノ料
 ノチマミト云フモノハ桌ニテオルナリコノ笠ニツケタル幘ハウスクシテ外ナミル
 ベケレハムシニテオリコレヲモチ井タルカラノ名カ。内藤廣庭ノ話ニ能登ノ國人
 ガ手巾シテ頬ホカブリスルヲむいをりぶるト云フヲ聞トガメテナニ故ニサハ云ゾト
 問フニ寒キトキ頭ヲ蒸シアタムル故ナルベシト老人ノ云ヘリケリトツ蒸ノ意ハ

イカマアランイツレニモ頭ニカブル帛ノ類タイフ言也。蒸衾ト云ヘルムシモ寐タル
 上ニ覆ヒ被ル義ノ言ニテモトハ全言ナラムカ考ベ。○追考(骨董集)ニモ件ノ証文
 ナ擧ダレド遺リタルコアリ。圖ナアゲタレ見古書トノミアリテ體ナラズ又(山家集)
 下「みくまのむなうさ」といあらトかむいたれいこのそこぶあゆむ此む
 たれいたの考ハ別ヨアリ中編ニクハシク云ハマシト云ヘ。○予イマダソノ中編ヲ
 見ス又云和歌分類七衣部(後柏原院御集)。身ヲをりて島にもあらぬをかかさ
 露ヲかたゝるむいのたれ衣とアレド此御歌(柏玉集)。四下。露ヲかたゝる虫の衣よト
 アリ(三玉集類題)ニハ終ノ句。秋部虫。虫のあはれさトアリ衣ヲよト哀ヲさトハ字形似タルニ
 テ一方ハ誤アルベシナニ、マレ虫のたれさぬノ歌ニハアラズ分類ナルハ誤也ト云
 ヘリ又云(空穂物語)印本樓の上馬四に乗たるをどこわらハ四人むいたれる人來て
 云トアルむいたれるハイ本ニぐたりつる人トアル方ヨロシキ由云ヘリ。○又縹字
 玉篇、慧琳音義、龍龕手鑑、字彙、正字通、康熙字典、品字箋、和玉篇ニ見エズト云ヘ
 リ。○又云(歌林拾葉)。井空集ニ季能卿ノ歌ヲ擧テむいのたれ衣ヲ蛇ノのさぬぬぎと
 るをいふ由いへるハ誤也ト云ヘリ。○又云幘ハ玉篇有肩脊也トアリ又云虫襖ハ色ノ
 名也(雅亮裝束抄)。三ニ見ユ襖ハ青ノ借字ナルベシトイベリ。○信友云(東鑑)。十。六十
 一。丁

増補雅言集覽

布衣虫襖上ヒアリ

ひーや虫屋。ムシカ(禁秘抄)下三四松虫鈴虫ノ類人々進之云々頭以下向嵯峨野誠有

逍遙是給虫屋向選虫奉之(續千)神祇虫屋をつくりて前大納言資季のもとへ送りつ

るそはとて從三位氏久(新六)六(夫)十四光俊住かれしもの野はらやあのおらんず

つを虫屋まひーのわぶる

ひトやう無常拾雜神明寺の邊自也無常所まうなて侍りけるがいと面白く侍り

れば元輔

ひーけら(空穂)とし蓋仕虎狼虫ららといへども人のちかきをよせき

補ひーもの(大和物)六ひろき庭まおひたる菜を摘てむーものといふ物まして

むもん無紋源あふひ四十むもんのうへの御(枕)十一檜扇むもんからる(源

末つじ卅むもんの櫻のはをかぎなよ、かまきかして

むせか(日本靈異記)下蒙然二合牟世可爾

むせりへる(源)桐つほ十云々かどまかトうもれ給まぜやらむせかへらせさ

まひつ(同)同十云々あといひもやらむせかへり給ふそとよ(同)わか紫廿ても

ま逢夜まれあるおと、むせかへらせ給ふさまもさすがいとよれば(同)玉つ

ら二廿三人をかむせかへりいとむつのくせきあねたり(同)夕きり卅この人々

もむせのへるさまかれ補新後撰戀一匡房「下のえ岩まの水のむせかへりもらさ

ぬされ袖ぬれける

むせぶ和名三哽咽和名食塞也(兼直集)糧もやり水もいといたうむせびて「い

まより出る泉をむせぶある昔をこふる聲ま有らん(万)四「白妙の袖わゆるべき

日をちりと心まむせびねのこかゆ源十天のまかこおそろく思ひ給

へらる、ことを心にむせび侍りつ、(万)三五こ、ろむせつ、(源)わかし四思ひむ

せたるも一本むせ万卅卅涙をのこひ牟世比つ、補新古夏式子内親王「聲ハいて雲路

にむせぶ時鳥涙やそ、くよひのむらさめ〇正明云雲路まかくといふおとを一さの

せちまむせぶといへる也(月清)下「まれまきて昔の跡を尋れバらぬ松にも風む

せぶなり(万)三卅まをもちかみをのこひむせびつ、こと、ひまれバ玉葉冬

後九條前内大臣「風むせぶひをらのくれかきくらしあかのたけまか、るむら雲(山

家)上「うき身まて聞もとしきの鶯の霞まむせぶ明の、こを續千春下「吹おろ

はあらしの山に春くれて井せきまむせぶ花のいらをみ(新古)冬俊成「かつこはりか

ついくたくる山川の岩間まむせぶ曉の聲(玉葉)雜一崇徳院「むのこと聲さてぬべき

世中はおもひむせびて過るよろりか

むせ (噓) (夫木) 三千里 「山深と立くる霧よむせればやかく鶯の聲のまれある

むせ (蒸) (万) 四 「川上のゆづいむら草むせつねよもかもあどあどとめあて

(朗詠集) 女郎花 花色如蒸粟俗呼爲女郎(文選) 九、五與鐘大理書黃侔蒸粟

補むせ (著聞) 十七、廿一 なでける手をむせととりてけり(同) 十二 頼度がうへをくろき

物がこりりこえけるを下よりむせととりとめてけり

むせ せらる (和泉式部集) 上 「それと見よ都の方の山ぎそよむせせられたるけふり

けふらば(源みをつくし) 六 万よおもひ給へむせせらるゝありさまを(同) 同 十おせ

えぬせまひよむせせられたりためしを思ひよをへて(同) 末つひ 廿「あさ日さけ

軒のたるひいとけあがらあどあつらむせせらるらん(万代) 維六 「むせせらる

る心のをこそかあしけれおもひいとけばとけやせき身を(後拾) 春上、紫 「そよしの

の春のりよきよかひめどもむせせられたる雪のいたくさ(續拾) 戀五、光明寺 「う

つり行そなたの帯れむせせられいかある色よえいそつらん(拾) 戀三、よみ 「春く

れば柳のいととれよけりむせせられさるわがさへろかか(續古) 春上、入道前 「そ

るやとき草さも見えぬ雪の中よむせせられさる鶯の聲(新古) 秋上、式子 「あともあ

き庭のあさちよむせせられ露のそこなる松むしの聲(同) 冬、攝政太 「かさよきの袖

のおほりもむせせられとけてねぬよの夢ぞそとかき(源朝) 廿 「とけてねぬね

さめさびよき冬によよむせせられつる夢のそとあさ

補むせ せらる (慈鎮集) 「何とかく見るこゝちこそむせせらるれ柳のいとぞみたは

春風(万) 十八、長歌云々 おもひむせせられあきつゝあがまのきみガ云々(殷富門院

大輔集) 「山河のさゞれが上のうは氷ゆきみかたみむせせられよなり(拾玉) 五 「玉

のをいむせせられてのそやみあまいかくも君のおもひとかき(山家) 上 「をらぬ

より袖ぞぬれれるをみあへ露むせせられてたてるよきあ

むせ (宇治拾) 二、三十筋 せかりむせとと折くふ(著聞) 十六 袴のうらうへと

あら、かよとりてむせととひろたられてうつくしき装束さんよよなりよなり

むせ (万) 九 りきむせびとこよよいたり(古) 戀五 (六帖) 六 「花をよきわれこそをた

にこのみよがほよ出て人よむせせられよけり(新古) 戀三 「あし引の山の下草むすび

置て戀やわたらんあふよをなま(欽明紀) 始約和親(大和物) 三 その忠峯が娘あり

と聞て云々かへりこと「我やその一本すゝさうら若とむせび時よまたよかり

より(万) 「君が代も我よもよれやいとろの岡の草根をいぎむせびてあ(万) 十一

世補雅言集覽 卷之廿八

「足引の名はおふやまを及ぼしふせてきみいむをさへあそざらめやも(同)廿「白
妙の我紐の緒のたえぬまにこひむをびせんあそん日まで(同)十一「いもが門ゆ
沢をぎかねて草むをぶ風吹とくなあそん日まで(伊勢物)四十一「うらわかみねよ
けい見ゆるわか草を人のむをさんこととぞいぞれもふ(源夕かほ)「ほのかにものさ
いの萩をむをばせの露のかごとをなまへりたま(同 柏木)六まとびをめよ一た
ま一ひの身よもりへらせありよ一をかの院の内よあくがれありかむをびとゞめ
給へよ(和泉式部集)返事せぬ女よ男のやるとて「あーとたよ草のまつりにて一
哉むをぶばかりのをとからせとも○草をむをぶと云ことと後世縁むをびとて神社
にかうよりあてゆひつくるやうれわざあるべし(補)康王母集「竹むをぶこの目ま
とほよ成ゆりつとそ一わかかなも其目もりよき(万代)春上「おくあまの霞をむをぶ
春風よ浪のかざしの花ぞさきをふ(拾)雜春「浦人の霞をあまにむをべとや浪の花
どもとめて引らん(枕)二十一「あろきよきよのむをべるうへよひきわたしけるをその
(後)別之「忘れとあまよ結びて別るれば逢見んまで思ひきたるな
むをぶ(水)拾(拾)雜戀(古)離別志賀の山をえよて女の山の井よて手あらひむをび
てのむを見て「むをぶてのあづくよよさる山の井のありても人よわりぬるりか

(古)春上「袖ひちてむをび一水のこられるを春たつけふのらせやとくらん(補)千
貫之 載)賀「君が爲とさらし川と若水よむをぶや千世のそとめなるらん(榮 鶴のとや
し)とづをむをびてい一をうつらんやうよ(隆信集)「男とほみ人もむすさぬいと
井よもみくさをさけて月のをみけり
むをぶのかみ(空穂 樓の上)下「人いれぬむをぶの神をうるべよていかゞをべきと
かやく下紐(元輔集)「千とせをば我なれとむをぶとさきむをびの神も祈るくら
ん(拾)雜戀「君みればむをぶの神ぞうらめしきつれなき人を何つくりけん(狹)二か
うもつくり置聞えさせけんむをぶの神さへうらめしければ(十六夜日記)「まもれ
たゞ契むをぶの神をらばとけぬうらまにたれまよさそ(詞花)戀上「心さへむを
ぶの神やつくりねんとくるれしきもみえぬ君をか(狹)三「中さきの世あるむすぶの
神のあおき給へる御ちぎりなれたま(和名)二産靈、日本紀云産靈 和名無須 比乃加美
むをぶ(万)三、十妹がむをび一ひもふきりへは(源 紅葉賀)五「いりさまにむかひむ
そべるちぎりにて此世よかゝる中れへどてぞ(同 桐つは)八「いとをかきそつもと
ゆひにかがきよをちぎることろのむをびこめつや 云々、左大臣「むをびつることろ
もふかきもとひよあきむらさきのいろあせせり(同 わか紫)廿なりよちひさく

増補雅言集覽卷之廿八終

ひきむをびて(同)夕かほ四十八十ののにも此きをの萩をむをびて云々

むそ(源)帝木三御むすこの君たち

むそめ(源)桐つは廿八たゞひとりかづき給ふ御むそめ(同)夕顔四むそめかぞわたりつとひたる程よて同玉かつら四むそめども思ひこがるを同わか紫十が

の大納言れむすめ物一給ふときたまへ(神代紀)下女

補むそび(賦語)に(万)十二十五「こまよき紐の結もときさなぬいそひてまでと一

なきかも(同)「紫の帯の結もときも見せもとかや妹にまひわたりをむ

むすびつけて(古)下秋八の前裁の菊にむすびつけて植ける歌平「うゑうゑ云々

むそびふくろ(拾)能上物へまかりなる人れもとぬさをむすび袋に入れてつかさ

とて(空穂)國のつり五下碁をうち給へ(中納言)まけ給ひぬとてうち給もきる給へ

むすび袋に入れていたたり

むそびふみ(源)あふみ六四十ひきむすびさるふと御枕のものとあり

むそびめ(狭)四上八色々の紙なる文どもとりちらされたれ云々紫の紙のあべてあら

ぬさましたるがむそびめかともたゞいととゆると

増補雅言集覽卷之廿八終

